

2017年度事業の概要

1 調査と研究	30	国が実施する事業等についての調査・協力	52
飛鳥藤原京の発掘調査	30	●平城宮・京跡の整備	52
平城京の発掘調査	30	●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究	52
企画調整部の研究活動	31	●キトラ古墳に関する調査研究	53
文化遺産部の研究活動	32	現地説明会・見学会	53
●歴史研究室の調査と研究	32	2 研修・指導と教育	54
●建造物研究室の調査と研究	32	文化財担当者研修と指導	54
●景観研究室の調査と研究	33	京都大学（大学院）との連携教育	54
●遺跡整備研究室の調査と研究	33	奈良女子大学（大学院）との連携教育	54
埋蔵文化財センターの研究活動	34	奈良大学への教育協力	54
●保存修復科学研究室の調査と研究	34	3 展示と公開	56
●環境考古学研究室の調査と研究	34	飛鳥資料館の展示	56
●年輪年代学研究室の調査と研究	35	平城宮跡資料館の展示	56
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究	35	解説ボランティア事業	57
国際学術交流	36	図書資料・データベースの公開	57
●中国社会科学院考古研究所との共同研究	36	4 その他	58
●中国河南省文物考古研究院との共同研究	36	刊行物	58
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究	36	人事異動	63
●大韓民国国立文化財研究所との共同研究	37	予算等	64
●西アジア諸国の文化財保存協力事業	37	職員一覧	65
●カンボジア	37	客員研究員一覧	66
●ミャンマー考古・国立博物館局との 技術移転・人材育成事業	37		
●セインズベリー日本藝術研究所との研究交流	37		
●中央研究院歴史語言研究所との研究交流	38		
海外からの主要訪問者一覧	39		
海外からの招へい者一覧	39		
奈文研研究者の海外渡航一覧	40		
公開講演会	42		
第9回東京講演会（有楽町朝日ホール）	42		
第120回公開講演会	43		
第121回公開講演会	43		
研究集会	43		
科学研究費等	44		
学会・研究会等の活動	51		

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2017年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で2件、藤原京跡で4件、飛鳥地域で3件である。また、立会調査は7件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮大極殿院の調査（第195次）は、大極殿院の東面北回廊と北面回廊の規模と構造の解明を目的として、大極殿院東北隅部（594㎡）を調査した。調査期間は2017年10月4日から2018年3月27日である。調査の結果、東面北回廊および北面回廊の礎石据付痕跡を15ヵ所検出した。その配置から、東面北回廊および北面回廊が複廊であった可能性が高い。柱間寸法は、桁行が東面北回廊の北端のみ13尺となる以外は14尺等間、梁行が10尺等間となる。礎石据付痕跡を確認した部分では、礎石は抜き取られており、礎石据付穴、抜取穴、根石を検出した。また、回廊の内外で回廊に並行する素掘溝を検出した。回廊造営中に雨水等を受けるための溝と考えられる。

このほか、水路改修にともなう藤原宮外周帯の調査（第192-7次）では、大規模な洪水にともなうとみられる自然流路を検出した。

藤原京跡の調査は、宅地造成あるいは住宅建設にともなう事前調査である。藤原京右京七条二坊、四分遺跡の調査（第192-2次）は、2017年6月1日から27日までの期間で実施した。発掘面積は122.5㎡である。調査では、弥生時代の溝、掘立柱建物等を検出し、四分遺跡東南部の様相解明の手がかりを得た。藤原京右京二条一坊、醍醐環濠の調査（第192-4・5・6次）では、条坊関連遺構のほか、中近世以降の醍醐環濠に関連する遺構の検出が期待された。調査期間は、第192-4次が2017年6月5日から14日まで、第192-5・6次は6月19日から7月11日までである。調査面積は、それぞれ27㎡、60㎡、60㎡である。調査の結果、中世から近世の複数時期に属する環濠とみられる溝を確認し、醍醐環濠の変遷を示す成果を得た。

飛鳥地域では、山田道の調査をおこなった（第193・194次）。店舗建設にともなう調査である。調査面積はそれぞれ214㎡、166㎡で、2017年4月10日から6月29日までの期間で実施した。調査の結果、山田道南側溝とみられる東西溝を検出した。既往の成果と合わせると、山田道は60大尺の幅員であった可能性が考えられ、山田道のルートについて具体的な検討が進んだ。それに加え、古墳時代の竪穴建物、溝、池

状遺構等、古墳時代から飛鳥時代にかけての様々な遺構を検出し、調査地周辺における4時期の遺構変遷を確認した。特に、調査区南部で検出した池状遺構は、谷地形を利用して古墳時代後期前半に人為的に築造されたとみられ、飛鳥時代中頃より埋め立てられたことが地質学をはじめ自然科学的分析によって確認されたことの意義は大きく、今後同様の遺構における調査方法の指針を示すことができたといえる。このほか、多量の土器・木質遺物等が出土したことも特筆される。

大官大寺南方の調査（第196次）は、大官大寺から山田道までの南北約450mの地域について、大官大寺の全容の確認とその南方の様相を解明することを目的とする。調査の初年度にあたる2017年度は、大官大寺南門の想定位置を含む南北100m、東西100mの範囲で地中レーダーを用いて地下探査をおこない、加えて、大官大寺中軸線かつ東四坊坊間路の東側溝が想定される場所で調査面積45㎡の試掘調査をおこなった。調査期間は、2018年3月6日から23日までである。地下探査の成果は現在分析中であるが、試掘調査では、掘立柱建物1基と南北堀、旧流路等を検出した。

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2017年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で6件、平城京跡で8件である。また、立会調査は48件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

平城宮では、東院地区（第584次調査、第593次調査、第595次調査）および第一次大極殿院地区（第585次調査）の発掘調査を実施した。東院地区の第584次調査は、第481次調査区の東側、第503次調査区の北側に重複させて東西29m、南北38mの調査区を設定し、奈良時代の掘立柱建物・堀、溝、石列を検出した。これらの遺構は、奈良時代において4時期にわたって変遷することが判明した。とりわけ奈良時代前半の桁行10間、梁行2間の大型の南北棟掘立柱建物を2棟隣接して検出したことが特筆される。

第593次調査は、この第584次調査区の北側に重複させて、東西29m、南北33mの調査区を設定し、奈良時代の掘立柱建物・堀、溝、井戸を検出した。これらは、奈良時代において4時期にわたって変遷することが判明した。奈良時代前半の遺構としては、東西9間以上、南北2間の南に廂が付く大型の東西棟掘立柱建物を検出した。この建物は、第584次調査で検出した、大型の南北棟建物と併存しており、大型の建物が

L字形に配置された空間が形成されていたことが判明した。さらに、この調査区の東北部では一辺約4.6mの掘方もち、周囲に石敷や石組溝をともなう平城宮では内裏の井戸に次ぐ規模の大型の井戸を検出した。この井戸は、四周に石組溝をめぐるせ、その石組溝の西には東西方向の石組溝が接続し、さらに素掘溝となってL字に分岐し二股にわかれていた。そしてその二股にわかれる東西方向の素掘溝を覆う東西6間以上、南北2間の南に廂が付く東西棟建物を検出した。これら一連の遺構は、井戸の水を、溝を通じて覆屋に配する機能が想定され、東院中枢部における食膳を準備する厨に関連する空間が想定される。

第595次調査は、第593次調査区の東側に重複させて、東西36m、南北42mの調査区を設定した。第593次調査で検出した、大型の東西棟建物の続きや大型の井戸から続く階段等の関連施設が確認されており、2018年度にかけてなお調査を継続している。

平城宮第一次大極殿院地区では回廊および南門の復元整備にともない、西面回廊および院内の礫敷、南門の中心付近の未発掘部分の発掘調査を実施した。その結果、西面回廊の基壇では、約1mの造成土を敷いた後に、掘込地業がなされていたことが新たに判明した。南門の基壇では、約1mの掘込地業を確認するとともに、抜取痕跡から基壇の南北に取り付く階段の位置を確認した。

平城京城では、史跡奈良山瓦窯跡のうちの中山瓦窯跡の隣接地で発掘調査をおこなった(第586次調査)。その結果、指定地内の1号窯の南壁の端部が検出されるとともに、1号窯が少なくとも2回の改修がおこなわれていたことが判明した。今後も指定地周辺の関連遺構の保護が求められる。

東大寺東塔院跡では、境内史跡整備事業にともない東大寺および奈良県立橿原考古学研究所と共同で3年次目にあたる発掘調査を実施した(第589次調査)。その結果、鎌倉再建期の南門が2×3間の東西棟礎石建物で、これに取り付く南面回廊が梁行2間の複廊に復元できることが判明した。創建期の南門基壇の検出等が課題として残る。

このほかに西大寺旧境内、法華寺旧境内で発掘調査を実施している。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する専門的な研

修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう研究に関わる様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修は、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査や、その成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を年度ごとの計画にしたがって実施している。2017年度は、専門研修14課程を実施し、延べ178名が受講した。また、研修受講者に対し、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と思うか、思わない」のアンケート調査をおこなった結果、100%の受講者から『思う』の回答を得た。

文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースとして、全国遺跡報告総覧の公開をおこなっており、極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・35mmスライドフィルム・建造物保存図等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修への協力事業として、(1) 集団研修「木造建造物の保存と修復」(アジア太平洋諸国から15名参加)、(2) 個別テーマ研修「博物館等における文化財の調査・記録・保存修復・活用」(フィジー、パプアニューギニア、ソロモン諸島から6名参加)、(3) ネパールで開催された「文化遺産ワークショップ」に講師等を派遣し協力している。

諸外国との国際共同研究としては、中国の中国社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究院、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業は、西トプ遺跡を対象にした調査と修復を実施しており、現在は北祠堂の解体・修復を終えて中央祠堂へと作業を進めている。このほか、文化庁受託事業によるミャンマー宗教・文化省との拠点交流事業では、ピュー文化の遺跡であるシュリクシェトラ遺跡や陶磁器の窯跡を題材に考古技

術の移転を目的とした研修をおこなっている。

平城宮跡資料館では、春期企画展「永野太造作品展—草創期の奈文研を支えた写真家—」を帝塚山大学と共催し、夏のこども展示として「ナント！すてきな!? 平城生活（ライフ）♪」を開催した。また、秋期特別展は、平城宮跡出土木簡の国宝指定を記念し、「地下の正倉院展—国宝平城宮跡出土木簡—」をおこなった。このほか、2018年1月には新春ミニ展示として「平城京の戌」を開催したほか、平城宮いざない館開館に合わせて、常設展の部分的な改装をおこなった。

写真室では、研究所内の各文化財記録写真の撮影や、写真データの保管管理をおこなっている。また、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法の開発もおこなっている。さらに近年では、各地の地方公共団体での埋蔵文化財写真の研修会等に講師として出席している。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2017年度は、仁和寺・薬師寺・唐招提寺・東大寺・法華寺・当麻寺・三佛寺、また奈良関係の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

仁和寺の調査では、御経蔵聖教第81函～第83函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第150函中世文書について、釈文を詳細に検討し、原本校正をおこなった。

薬師寺調査では、第10函・第11函の調書原本校正と、第26函の写真撮影を実施し、目録刊行に向けた原稿を準備しつつある。

唐招提寺の調査においては、宝蔵に所在する聖教第

9函・第13函～第16函の整理作業と、第5函～第7函の写真撮影をおこなった。

東大寺所蔵の新修東大寺文書聖教について、科学研究費補助金も充当して調査・写真撮影を実施した。

法華寺所蔵の歴史資料につき、近世の日記の調書作成・写真撮影をおこなった。また、興福寺所蔵の歴史資料について、興福寺の二条家が作成した部類記を検討し、その内容を公表した。

当麻寺が所蔵する未整理の経典を調査し、東1函～東6函の調書を作成した。

三佛寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、文書等の調書を作成した。また奉納経の調査検討・写真撮影をおこない、その知見の一部を公表した。

水室神社宮司の大宮家所蔵文書につき、奈良市教育委員会と連携研究を実施した。春日大社関係の文書である。そのなかの、函文書の調書を作成した。

金峯山寺関係の個人蔵の歴史資料について調査を実施した。また、興福寺関係の個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当して調査を実施した。

奈良県の依頼で調査した生駒市長福寺所蔵の大型木札等の成果を、『木簡研究』第39号に公表した。

その他、調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・東大寺貴重書調査・文化庁による仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復、活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法を再検証するための調査研究を、現存建物のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2017年度におこなった調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を進めた。法隆寺に保管されている昭和修理時に取り替えられた部材の整理および収納にともない、部材の実測、写真撮影、痕跡調査、図化等をおこなっている。2017年度は、金堂の部材について報告書にすべく、補足調査、執筆、編集作業をおこなった。

2016年度・2017年度事業として、出雲市内神社建築調査を出雲市より受託した。2017年度は、補足調査をおこなうとともに、報告書の執筆・編集をおこない、出雲市教育委員会より報告書が刊行された。

2017年度事業として、矢掛町矢掛宿伝統的建造物

群保存対策調査を矢掛町より受託した。町では、かつて保存対策調査がおこなわれ、その後は景観保存がおこなわれてきたが、再度、伝統的建造物群の保存制度を検討するために、再調査をおこなったものである。現状把握のための悉皆調査、外観の特徴等を明確にする調査をおこない、伝統的建造物群としての保存の可能性を検討し、矢掛町教育委員会より報告書が刊行された。

2017年度・2018年度事業として、津山市城西伝統的建造物調査を津山市より受託した。旧津山城下町西部のかつての町人地と寺町について、伝統的建造物の現状をあきらかにすることを目的とする。2017年度は、調査地区内の敷地・建物の悉皆的な現況把握をおこない、地区の特徴を示す町家・寺院建築の調査をおこなった。2018年度も調査を継続し、報告書を刊行する予定である。

この他、上記調査研究の成果をふまえて、各地で実施されている文化財建造物保存・史跡整備事業等について指導・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取組として、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

2012年度から、外部の専門家・実務者を含む『「文化的景観学」検討会』を編成し、文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等に関する検討を深めてきた。2017年度は宇治市および金沢市における文化的景観保護の事例に関する成果をまとめ、『都市の営みの地層』を刊行した。

文化的景観研究集会（第9回）を「地域らしさを支える土木」をテーマとして12月9～10日に開催し、報告・ディスカッション（会場は京都府立大学）、エクスカージョン（琵琶湖南東岸の水郷地帯）をおこなった。参加者は約105名であった。また、前年度に開催した文化的景観研究集会（第8回）「地域のみかたとしての文化的景観」の報告書を刊行した。

その他、これまで当研究室で作成してきた文化的景観の鳥瞰図を解説するためのリーフレット『文化的景観全覧図』を作成した。また、当研究所Webサイトにおいて公開している重要文化的景観選定地区の情報について、最新のものを追加した。

地方公共団体からの受託研究については、京都市から受託して、京都市の文化的景観について市域の調査研究を続けるとともに、「京都岡崎の文化的景観」の普及啓発のための子供向けパンフレットを執筆・編集し、「北山杉の林業景観」等について、民家・集落等の現地調査、住民へのヒアリング、住民向けの調査報告をおこなった。また、南山城村から受託して、京都府選定「南山城村の宇治茶生産景観」の4地区の茶畑について、現地調査をおこない普及啓発のためのパンフレットを作成した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査をおこなっている。

2017年度は、前年度おこなった遺跡整備・活用研究集会の報告書『近世城跡の近現代』を刊行した。報告書には発表した報告4本、関連論文4本、各地の事例報告7本を掲載した。史跡の保存活用計画の策定が盛んにおこなわれているが、近世城跡の近代以降の履歴をどのように捉えるかは城跡の保存と活用の方向性を考える上で重要な視点であることが再認識できた。

また、「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」をテーマとして遺跡整備活用研究集会を12月22日に開催した。文化庁は歴史文化基本構想策定の推進や日本遺産の認定等文化財の総合的な活用を進めてきており、地方自治体でも文化財を地域づくりや観光振興に活かす取組や体制整備がおこなわれてきている。研究会ではこうした事柄に関係した現状と課題を共有することができた。

キトラ古墳整備関係では特別史跡キトラ古墳整備事業報告書の編集をおこなった。また、墳丘近くに壁画の残存状況を示す乾拓板が設置されたが、国営飛鳥歴史公園と共催で遺跡見学と乾拓板の活用をおこなう体験学習会を4回おこない、活用に関する実践的な取組をおこなっている。

庭園の調査研究については、まず、2016年度からの5カ年で庭園の歴史に関する研究（近世庭園）に取り組んでいる。2年目の2017年度は10月29日に「回遊式庭園と庭園文化」をテーマとした研究会を開催し、年度末にその内容を取りまとめた報告書を刊行した。回遊式庭園の様式成立やその後の変遷、展開の在り方について、庭園史、建築史、美術史等、多分野の

研究現況をふまえた意見交換をおこない、今後の研究課題について認識を深めることができた。

また、奈良市教育委員会との連携研究「奈良市における庭園の悉皆的調査」については、奈良町の民家の庭や料亭の庭等の現地調査をおこなった。

さらに、研究交流をおこなっている韓国国立文化財研究所とは新たな5ヵ年計画が始まり、2年目の2017年度は韓国で名勝指定されている庭園を中心に現地調査を実施した。

その他、名勝法華寺庭園の実測調査をおこない、実測図を完成させるとともに、建造物調査、史料調査をおこなった。保存活用計画の基礎資料となるように戦前の写真や実測図との比較により、変遷や現状をあきらかにした。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4つの研究室は、それぞれの事業計画にしたがって埋蔵文化財に関する調査・研究を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に基づき専門的な助言や協力をおこなっている。2017年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、1) 考古遺物の保存処理法に関する調査研究、2) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究、3) 建造物の彩色に関する調査研究、4) 古墳壁画の恒久的保存に関する調査研究を実施している。

1) では①平城宮跡出土木製遺物の一時保管中の水質に関する基礎データの収集、②大型木製遺物の薬剤含浸速度を定量的に把握するための基礎実験、③鉄製遺物の腐食に対して湿気環境がおよぼす影響についての基礎研究、④鉄製遺物に対する新規脱塩法の最適条件の検討、⑤台の下遺跡出土真珠様玉製品の材質分析、⑥古代寺院出土の建築金具の材質・技法調査に取り組んだ。また、「金属製遺物の調査・研究に関する最近の動向」をテーマとした研究集会を開催した。2) では①平城宮跡遺構展示館における環境調査、数値解析にもとづく遺構劣化の抑制試験の実施と検証、②大分市元町石仏の環境調査、塩類析出に関する室内実験、石仏表面の塩類除去法の検討、③高槻市ハニワ工場公園における環境調査と遺構の劣化状態調査による劣化原因の解明、塩析出に対して遺構展示館内の照

明設備や換気の運用方法がおよぼす影響の検討、④土壌カラム実験による埋蔵環境のモデル化、および埋蔵環境下における金属製遺物腐食のモデル化に関する研究⑤石造文化財に多用される軟岩類の強度試験を実施した。3) では①諸戸家住宅塗装の分析、②平城宮跡復原大極殿において外界気象の実測調査と塗装の劣化状態調査をおこない、周辺環境が塗装の劣化におよぼす影響について検討した。4) では①日田市ガランドヤ古墳における壁画保存の環境設計および通年の結露抑制に効果的な環境制御法に関する現地検証作業、②模擬古墳を用いた古墳石室内環境が金属製遺物の腐食におよぼす影響の検討、金属製遺物の古墳石室内での腐食挙動に関する検討、③宮崎市蓮ヶ池横穴群の劣化状態調査および温熱環境調査から、活用を視野にいれた横穴の保存環境設計とその制御方法を検討した。

受託事業として、2017年度 国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討および墳丘復元法検討業務（日田市）、松帆銅鐸・舌の調査研究（南あわじ市）、法隆寺若草伽藍跡西方の調査出土壁画片の調査（斑鳩町）、非破壊調査による絵画構造解明のための基礎研究（愛知県）の4件を実施した。また、連携研究として、松平忠雄墓出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）、史跡妻木晩田遺跡・仙谷墳丘墓群の保存整備に係る環境調査（鳥取県）を実施した。

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（文化庁）および文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館 四神の館内）の管理・運営業務（文化庁）において、壁画の劣化原因究明および修理のための材料調査、高松塚古墳石室石材の安定化対策、四神の館における壁画管理環境の調査と管理をおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

2017年度の発掘調査や整理、報告書作成としては、金井東裏遺跡や金井下新田遺跡（以上、群馬県）、六反田南遺跡や石舟戸遺跡（以上、新潟県）、大曲輪貝塚（愛知県）、纏向遺跡（奈良県）等の遺跡から出土した動物遺存体や骨角製品の調査・分析をおこなった。また、藤原宮下層運河、平城京右京一条二坊・二条二坊において、古環境復元のための調査を実施した。

新潟県の六反田南遺跡（縄文時代中期）や石舟戸遺

跡（縄文時代晩期）では、約5,000点におよぶ焼けた動物骨の分析を実施した。有機質遺物が残りにくい堆積環境であっても、骨が焼けて無機化したために、残りやすくなったものと考えられる。貝塚の分布密度が低く出土事例の少ない日本海側における動物資源利用をあきらかにすることができた。

東日本大震災の復興事業にともなう発掘調査や整理作業では、台の下貝塚や磯草貝塚（以上、宮城県）、堂の前貝塚（岩手県）への支援を継続的に進めた。

宮城県の台の下貝塚（縄文時代中～後期）では、約27,000点におよぶ動物遺存体や骨角器の分析をおこなった。哺乳類はニホンジカやイノシシが主体であった。とくにニホンジカは骨角器素材としても多用されていることから、重要な狩猟対象獣であったと考えられる。貝類はマガキを主体とし、魚類はマグロ属やマイア科が数多く認められた。次年度は、1mm目フルイから抽出された微細資料の分析を進めていく予定である。

研究成果の発信として日本動物考古学会や日本中国考古学会、近江貝塚研究会等の学会・研究会で発表をおこなった。国際的な若手研究者セミナー『ユーラシア世界における動植物利用の拡散—生物考古学最前線—』では、藤原宮や平城宮における動物利用について発表した。社会還元や普及事業として、金沢大学や池上曾根弥生学習館等で公開講座や講演をおこなった。また『埋蔵文化財ニュース』170号において、環境考古学研究室の研修内容を紹介した。

現生標本の収集と公開では、ウシやマグロ等の標本を収集するとともに、足跡調査のための標本作製した。三次元計測による立体的な骨格図譜のWebサイトを拡充・更新した。

●年輪年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するべく、出土遺物、建造物、美術工芸品等、多岐にわたる木造文化財の年輪年代調査をおこなっている。また、標準年輪曲線の拡充による木造文化財の産地推定や、年輪年代学的手法による同一材の推定、マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊調査手法の活用等、年輪年代学に関する基礎研究や年輪年代学を応用した文化財の科学的分析手法の研究開発をおこなっている。

年輪年代学的手法による同一材の推定では、木簡に本手法を応用した研究を実施した。2017年度は、奈良文化財研究所都城発掘調査部平城第524次調査（法華寺旧境内隣接地）出土の木簡削屑を対象とした同一

材推定を中心に調査を進め、分析対象木簡を同一材に由来する群に分類し、同一簡について検討するという新たな視点を打ち出した。年輪年代測定では、概ね100層以上の年輪を有する試料を対象とするのが一般的で、年輪数が少ない小型の木製品に適用される機会は必ずしも多くない。いっぽう、年輪年代学では、年代測定手法であるクロスデーティングにより、同一材由来の推定についてもおこなうことが可能である。これを木簡に適用することにより、木簡やその削屑の同一材関係や、刻まれる年輪の新旧関係をあきらかにすることができる。この年輪年代学的な成果にもとづいた木簡の接続の検討をおこなうことで、例えばこれまで断片的な文字であったものが単語や文章として意味を持つものになる等、木簡から得られる情報の増大を目指している。この成果により、おそらくもっとも小さな出土木製品のひとつであろう木簡削屑に対しても年輪年代学的手法の適用が可能であることを提示することができたといえる。

また、2017年度は、（公財）鳥取県教育文化財団との連携研究により、鳥取市松原田中遺跡出土木材の年輪年代調査を実施し、布掘建物の地中梁について年輪年代測定に成功するとともに、山陰地方の年輪データを蓄積する等の成果が得られた。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室では、主に遺跡から得られる諸情報の研究およびその調査手法について検討をおこなっている。

2017年度は、以下の点について活動を進めた。

遺跡の研究としては、従来から継続している古代の官衙遺跡の情報収集として建物および遮蔽施設を中心とした政庁を構成する遺構の収集と整理をおこなった。加えて、寺院・官衙における情報について追加をおこなった。これらの作業により抽出したデータをデータベースとして公開している。また、新たに皇朝十二銭と鈿帯金具についてのデータの収集をおこなっている。

加えて、古代官衙・集落研究集会を開催し、前年度の報告書として『郡庁域の空間構成』および資料『地方官衙政庁域の変遷と特質』を発行した。

また、考古資料および文献資料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開をおこない、発掘調査データからの災害痕跡データの抽出をおこなった。また、発掘調査現場における災害痕跡の調査、資料採取、分析、報告を通じて防災および減災に寄与する遺跡からの歴史的な情報の

抽出を進めている。

調査手法の開発としては、SfM・MVSおよびLiDARを中心とした3次元計測手法の洗練化と対象の拡大を主眼とし、遺跡周辺地形の抽出、森林下における微地形の確認、土器・瓦等の迅速な計測、微細資料の計測等をおこない、成果を得ている。また、自治体等の依頼により、3次元計測のワークショップを日本各地で開催し、低コストで実用可能な技術について、その有効性と限界を考慮しつつ普及する活動をおこなっている。

また、多チャンネルによる探査機器の試用を進め、より迅速かつ高密度での遺跡の地下情報の取得を可能とする試験を平城宮および大官大寺、鞠智城でおこない、恭仁宮および宮滝遺跡で実際の測定をおこなっており、発掘成果と比較を予定している。

加えて、被災地への支援として、熊本県下の被災装飾古墳の3次元計測および探査をおこない、被害状況の基礎的な資料を作成した。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、中国、韓国、カンボジアの3カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、ミャンマーに対して技術移転・人材育成に関する事業をおこなっている。また、イギリス、台湾の研究機関とも研究協力をおこなういっぽう、奈文研以外の機関がおこなう支援協力事業にも参加している。

●中国中国社会科学院考古研究所との共同研究

9月に中国河南省洛陽市にある中国社会科学院考古研究所の洛陽工作站に今井晃樹、岩戸晶子、清野陽一、栗山雅夫の4名を派遣し、北魏洛陽宮城の遺物整理作業と遺物調査を実施した。今回はおもに出土した軒瓦、鴟尾、鬼瓦等の実測図作成および写真撮影をおこなった。あわせて今後の遺物整理作業について先方と協議するとともに、洛陽宮城大極殿院の発掘調査現場を視察した。また、先方と数年来協議を進めてきた「友好共同研究議定書」の内容について、12月に奈良文化財研究所の渡辺副所長と先方の朱岩石副所長が中国の考古研究所で最終的な調整をおこない、2018年2月27日に奈文研において、松村所長と先方の陳星燦所長が議定書に調印した。今後、両研究所の共同研究や学術交流をさらに促進していく予定である。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2015年3月19日締結の「友好共同研究議定書」第4条と「友好共同研究覚書」の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の考古学的研究を実施してきた。現在は両窯跡出土品の整理、調査・研究を共同で継続的に実施している。2016年度に『鞏義黄冶窯』中国語版報告書を刊行し、現在は日本語版の刊行にむけての作業を進めている。

2017年度は、共同研究第4期5ヵ年計画の3年目にあたる。2002年から2004年にかけて発掘調査した河南省鞏義市黄冶窯跡と2005年から2007年にかけて発掘調査した同市白河窯跡から出土した資料の整理作業を進め、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行にむけての作業をおこなった。あわせて、唐三彩関連資料の調査も実施した。9月11日から9月15日まで、河南省文物考古研究院は劉海旺、王琴、趙志文、李曉莉、唐靜の5名の研究者を派遣し、奈文研を訪れ、学術交流をおこなった。また、奈良・東京の博物館等を見学した。12月18日から12月22日まで、奈文研は降幡順子、神野恵、森川実、丹羽崇史、山藤正敏の5名の研究者を河南省文物研究院に派遣し、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行に関する協議をおこない、黄冶・白河唐三彩窯跡出土品の資料調査を実施した。また、西安を訪問し、陝西省考古研究院にて唐三彩窯跡出土品など関連資料の調査をおこなった。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所と遼寧省文物考古研究所との共同研究は、5月末に友好共同研究の協定書を取り交わし、「三燕文化出土遺物の研究」と題する新たな共同研究を開始した。まず、6月24日から7月1日にかけて、李龙彬副所長、谷麗芬、徐政、苏军强的4名を招へいし、今後4年間の共同研究の進め方について具体的に協議するとともに、日本の関連資料や遺跡、文化財の保存・活用状況等を視察した。6月26日には、奈文研にて李龙彬副所長による「遼陽市で新たに発見された河東新城後漢壁画墓とその相関する問題について」と題する講演会を開催した。

奈文研からは、10月17日から21日にかけて、廣瀬覚、諫早直人、大澤正吾、栗山雅夫、小池伸彦の5名を遼寧省文物考古研究所に派遣し、大板営子墓地、喇嘛洞墓地出土の土器、金属製品の調査をおこなった。また、2015年度に遼寧省文物考古研究所で実施した日中学術研究会「遼西地区東晋十六国時期都城文化研究学術検討会」の成果を学術論文集として刊行すべ

く、翻訳、編集作業を進めた。

●大韓民国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協定書を締結し、共同研究を実施してきた。2016年4月には研究交流協定書、共同研究合意書、発掘調査交流合意書を更新し、これに基づき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施している。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題にもとづき、5回の派遣と5回の受入を実施した。研究成果は5ヵ年計画の最終年度にとりまとめる予定である。

発掘調査交流については、奈文研より国立慶州文化財研究所へ研究員1名を派遣し、新羅関連遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約2ヵ月間であった。また、国立慶州文化財研究所から研究員1名を受入れ、都城発掘調査部（飛鳥藤原地区、平城地区）において共同発掘調査を実施した。受入期間は約2ヵ月間であった。

●西アジア諸国の文化財保存協力事業

当事業に関して近年は、ヨーロッパ等で開催される西アジア・中央アジア諸国の文化遺産保護に関する会議への出席や、日本での資料収集、中央アジア諸国における文化遺産保存修復事業への協力等、実行可能な範囲で事業を続けている。

2017年度は、5月にアゼルバイジャンでおこなわれたユネスコ・シルクロード・オンライン基盤国際ネットワーク会議に出席し、9月27日から10月2日には、東京でおこなわれたパーミヤーン世界遺産保護専門家会議等に出席した。6月と2月には、ウズベキスタンにおいて、ファズテパ仏教遺跡から出土した壁画の保存修復作業に協力した。また、6月のクラクフ（ポーランド）で開催されたユネスコの第42回世界遺産委員会に研究員1名を派遣し、特に議論となっている紛争や災害と文化遺産の問題について資料や情報の収集に努めた。

●カンボジア

カンボジアとの共同研究では、2002年から対象遺跡をアンコール・トム内の西トップ遺跡に定め、調査研究・修復活動を続けている。2015年度から継続中の北祠堂の調査・修復活動は2016年度に解体作業が終了し、下成基壇の直下から検出されたレンガ遺構の

調査を完了した。2017年度は再構築作業を順次進め、2017年度末に完成した。これを受け、中央祠堂屋蓋部の解体を2017年度末に着手し、順次調査と並行して解体作業を進めている。

また、2017年6月と12月にシムリアップで開催された、アンコール遺跡群国際調整委員会において西トップ遺跡の調査・修復活動に関する報告をおこなっている。2018年3月にはカンボジア王立芸術大学の教授と若手研究者を招へいし、出土遺物の調査と公開に関する研修をおこなった。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

奈良文化財研究所は、2013年度から文化庁の文化遺産国際協力拠点交流事業を受託し、ミャンマー考古・国立博物館局と共同で考古分野の技術移転・人材育成をおこなっている。2017年度は、①陶磁器の調査研究と②考古遺跡の測量についての研修を、日本とミャンマーで実施した。8月にヤンゴン大学考古学科の講師2名と大学院生1名を招へいし、蛍光X線分析法による陶磁器の調査研究について講義と実習をおこなった。2018年2月に、研究員3名を沿岸部のモーチンに派遣し、ミャンマーの考古学者5名とともに窯跡および出土陶磁器の調査をおこない、技術移転をはかった。遺跡測量の研修は、10月に考古・国立博物館局の職員3名を招へいして実施した。12月には研究員3名をピーの考古学フィールドスクールに派遣して遺跡測量の研修をおこない、同校の講師と学生24名が受講した。

●セインズベリー日本藝術研究所との研究交流

奈良文化財研究所と英国にあるセインズベリー日本藝術研究所は、2015年12月に日本考古学の国際的研究の推進事業を共同して実施することを目的に、共同研究の協定を締結した。2017年度は、5月30日に国立科学博物館にて国際研究集会「農業学の過去、現在、未来：新しい日英共同研究の実現に向けて」を両研究所の共催で開催した。また、2月26日には英国ヒストリック・イングランドにて考古学データアーカイブに関する意見交換会、2月27日に英国ヨーク大学 Archaeology Data Serviceにおいて欧州の遺跡データベースであるアリアドネ2に関する新制度策定やデータ連携方式等に関する協議をおこなった。

●中央研究院歴史語言研究所との研究交流

台湾・中央研究院歴史語言研究所（以下、史語所）と奈良文化財研究所は、木簡関連分野と考古分野での研究協力を進めている。木簡の分野では、今後の木簡（簡牘）画像データ公開の考え方・技術・方法について、メールで意見交換をおこない、日台双方でそれぞれ検討をおこなった。

考古分野では、2018年2月に研究員等3名が史語所を訪問し、台湾出土陶磁器の調査をおこない、関連遺跡の現地博物館もあわせて見学した。資料には、近世陶磁器のほか、近現代の日本製陶磁器も含まれており今後の研究が期待される。

海外からの主要訪問者一覧

- 中国/河南省文物建築保護研究院・副所長 王天勁 他5名/ '17.6.7/平城宮跡見学(朱雀門・大極殿・発掘現場)
- 韓国/国立扶余文化財研究所・所長 李桂憲 / '17.6.13/百濟帝積寺址の調査現状と今後の課題について講演
- 中国/社会科学院青年研究者代表団・人事教育局長 張冠梓 他24名/ '17.6.30/平城資料館、大極殿、遺構展示館見学
- 韓国/国立文化財研究所建築文化財研究室・学芸研究士 金東烈 他5名/ '17.7.12/皇龍寺回廊考察研究のための日本事例調査と研究交流および日本古代建築道具研究現況把握のための基礎資料収集
- 韓国/翰林大学・学生 ノ・ヘミン 他3名/ '17.8.1/奈文研の業務内容と日本文化財管理・維持・活用についての質問
- 台湾/台湾医学大学・副教授 邱佳慧 他8名/ '17.8.9/研究所見学
- ミクロネシア/ポーンベイ州知事 M.K.ピーターソン 他1名/ '17.8.11/研究所の概要説明、平城宮跡資料館・第一次大極殿・遺構展示館見学
- フィジー/フィジー博物館考古室・現地調査官 Nikolau Daloracika Tokainabatu (ニコラウ ダロラシカ トカイナバトゥ) 他2名/ '17.10.23~10.24/ ACCUによる文化遺産の保護に資する研修
- バブアニューギニア/バブアニューギニア国立美術博物館保存室・主任保存技師 Jethro Tulupul Stalen 他1名/ '17.10.23~10.24/ ACCUによる文化遺産の保護に資する研修
- ソロモン諸島/文化観光省ソロモン諸島国立博物館考古室・考古調査員 Grinta Gay Ale'eke / '17.10.23~10.24/ ACCUによる文化遺産の保護に資する研修
- 中国/復旦大学文物与博物館額系・教授 呂静 他5名/ '17.10.25/都城発掘調査部、埋蔵文化財センター訪問
- 台湾/国立台北芸術大学文化資源学院・大学院生 計30名/ '17.12.6/平城宮跡および奈良文化財研究所の見学
- インドネシア/教育文化省世界文化遺産課・課長補佐 Yunus Arbi 他1名/ '17.12.12/平城宮跡の管理について視察
- 中国/成都市木造歴史的建造物研修団・団長(成都市文化広電新聞出版局博物館 処・処長) 李瑾 他11名/ '17.12.20/文化財建造物を中心とする文化遺産の保存・活用研究の取り組みについて視察
- トルコ/文化観光庁文化遺産博物館局博物館本部・考古学専門家 Ibrahim Baris

SARICA 他9名/ '18.1.29/ JICA国別研修「トルコ博物館及び文化財の自然災害からの保護に係る能力開発」

●韓国/文化財庁新羅王京核心遺跡復元整備事業推進団・学芸研究官(チーム長) 権宅章 他4名/ '18.2.27~3.1/第一次大極殿院築地回廊復元関連の発掘および復原考証研究

海外からの招へい者一覧

- PLOKINGHORNE Martin (フリンダース大学・主任研究員) /オーストラリア/ '17.3.31~11.18
- 李龙彬(遼寧省文物考古研究所・副所長) /中国/ '17.6.24~7.1
- 谷麗芬(遼寧省文物考古研究所・館員) /中国/ '17.6.24~7.1
- 徐政(遼寧省文物考古研究所・館員) /中国/ '17.6.24~7.1
- 苏军强(遼寧省文物考古研究所・館員) /中国/ '17.6.24~7.1
- 李喜永(国立文化財研究所・林業事業官) /韓国/ '17.7.18~7.22
- 李元浩(国立文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '17.7.18~7.22
- 羅明河(国立文化財研究所・自然文化財研究室長) /韓国/ '17.7.18~7.22
- Than Than Thein (ヤンゴン大学考古学部・講師) /ミャンマー/ '17.8.21~8.27
- Naing Naing Lay Maw (ヤンゴン大学考古学部・准講師) /ミャンマー/ '17.8.21~8.27
- Ei Shwe Phy (ヤンゴン大学・大学院生) /ミャンマー/ '17.8.21~8.27
- 劉海旺(河南省文物考古研究院・院長) /中国/ '17.9.11~9.15
- 趙志文(河南省文物考古研究院・研究員) /中国/ '17.9.11~9.15
- 李曉莉(河南省文物考古研究院・館員) /中国/ '17.9.11~9.15
- 唐静(河南省文物考古研究院・館員) /中国/ '17.9.11~9.15
- 王琴(河南省文物局文物資源管理利用処・処長) /中国/ '17.9.11~9.15
- 鄭 聖睦(慶州文化財研究所・學藝研究士) /韓国/ '17.9.11~11.2
- Kyaw Myo Win (ミャンマー宗教文化省世界遺産部・副部長) /ミャンマー/ '17.10.15~10.21
- Kyaw Nyi Nyi Htet (ミャンマー宗教文化省ピイ考古学フィールドスクール・講師) /ミャンマー/ '17.10.15~10.21
- Htun Htun Aye (ミャンマー宗教文化省世界遺産部・部長補佐) /ミャンマー/

'17.10.15~10.21

- 李有壽(黒龍江省文物考古研究所 副研究館員) /中国/ '17.10.23~10.29
- 李昱(河北大学歴史学院 講師) /中国/ '17.10.23~10.29
- 岳健平(脊椎動物与古人類研究所 博士研究生) /中国/ '17.10.23~10.29
- 鄭仁部(国立伽耶文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '17.12.18~12.22
- 尹亨準(国立慶州文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '17.12.18~12.22
- 呉東埜(国立羅州文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '17.12.18~12.22
- 韓志仙(国立中原文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.1.15~1.19
- 姜素英(国立文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.1.15~1.19
- 李志映(国立羅州文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.1.15~1.19
- 李恩碩(国立海洋文化財研究所・海洋遺物研究課長) /韓国/ '18.1.15~1.19
- 黄仁鎬(国立文化財研究所・学芸研究官) /韓国/ '18.1.15~1.19
- 田庸昊(国立文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.1.15~1.19
- 文玉賢(国立中原文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.2.20~2.23
- 張誠允(国立文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.2.20~2.23
- 李仁淑(国立慶州文化財研究所・学芸研究士) /韓国/ '18.2.20~2.23
- 陳星燦(社会科学院文物考古研究所・所長) /中国/ '18.2.26~3.2
- 朱岩石(社会科学院考古研究所・副所長) /中国/ '18.2.26~3.2
- 劉国祥(社会科学院考古研究所・科研処長) /中国/ '18.2.26~3.2
- TALGAT MAMIROV (国立博物館国家遺産研究所・考古遺産部長) /カザフスタン/ '18.3.2~3.13
- Young Ratana (国立芸術大学・准教授) /カンボジア/ '18.3.4~3.11
- Thach Phanith (国立芸術大学・卒業生) /カンボジア/ '18.3.4~3.11
- El Puthipor (国立芸術大学・卒業生) /カンボジア/ '18.3.4~3.11
- TAIMAGAMBETOV ZHAKEN (国立博物館・館長代理) /カザフスタン/ '18.3.21~3.24
- SADUOV ASSILKHAN (カザフスタン文書センター・所長) /カザフスタン/ '18.3.21~3.24
- UALIYEV KUATZHAN (スポーツ・文化省・官房長) /カザフスタン/ '18.3.21~3.24
- YU CHONG (中山大学社会学与人類学

学院・副研究員) / 中国 / '18.3.25 ~ 3.31

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 石橋 茂登：台湾 / '17.4.20 ~ 4.23 / 講演・シンポジウム参加 / 先方負担
- 杉山 洋：カンボジア / '17.4.22 ~ 4.28 / 西トップ遺跡の調査修復 / 運営費交付金
- 森本 晋：アゼルバイジャン / '17.5.2 ~ 5.7 / ユネスコ主催第3回シルクロード・オンライン会議出席 / 先方負担
- 海野 聡：ブータン / '17.5.29 ~ 6.5 / ブータンにおける歴史的建造物調査 / 科学研究費
- 前川 歩：ブータン / '17.5.29 ~ 6.5 / ブータンにおける歴史的建造物調査 / 科学研究費
- 田村 朋美：ウズベキスタン / '17.5.31 ~ 6.7 / ウズベキスタン南部地域出土ガラス製遺物の調査 / 科学研究費
- 影山 悦子：ウズベキスタン / '17.5.31 ~ 6.10 / ポスト・クシャーン朝期の遺物の調査、ファヤズテパ遺跡出土壁画の記録、調査 / 科学研究費、助成金
- 佐藤 由似：タイ、カンボジア / '17.6.7 ~ 6.25 / 東南アジア大陸部研究に関する国際学会、アンコール文化遺産保護に関する研究協力 / 先方負担、運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア / '17.6.18 ~ 6.25 / 西トップ遺跡の調査修復 / 助成金
- 影山 悦子：イギリス / '17.6.24 ~ 6.30 / 京都大学国際シンポジウム History and Culture of Iran and Central Asia in the first Millennium C.E.への参加、研究報告等 / 先方負担
- 佐藤 由似：ポーランド / '17.6.30 ~ 7.9 / ヨーロッパ東南アジア考古学会での発表 / 運営費交付金
- 森本 晋：ポーランド / '17.7.4 ~ 7.14 / 第41回ユネスコ世界遺産委員会出席 / 運営費交付金
- 庄田 慎矢：韓国 / '17.7.7 ~ 7.9 / 日韓新石器時代研究会に参加するため / 科学研究費
- 島田 敏男：タイ、カンボジア / '17.7.12 ~ 7.17 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 / 運営費交付金
- 丹羽 崇史：中国 / '17.7.15 ~ 7.18 / 上海博物館附属実験施設等の調査 / 科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア / '17.7.15 ~ 7.25 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 / 運営費交付金
- 脇谷 草一郎：中国 / '17.7.16 ~ 7.18 / 故宮博物院養心殿の劣化状態調査に参加 / 運営費交付金
- 渡邊 晃宏：韓国 / '17.7.20 ~ 7.24 / 国立文化財研究所との木簡データベース連携協議、および慶州新出土木簡の調査 / 科学研究費
- 高田 祐一：韓国 / '17.7.20 ~ 7.24 / 国立文化財研究所との木簡データベース連携協議、および慶州新出土木簡の調査 / 運営費交付金
- 方 国花：韓国 / '17.7.20 ~ 7.24 / 国立文化財研究所との木簡データベース連携協議、および慶州新出土木簡の調査 / 運営費交付金
- 加藤 真二：中国 / '17.7.21 ~ 7.29 / 霊井遺跡関連遺物の調査 / 科学研究費
- 国武 貞克：中国 / '17.7.21 ~ 7.29 / 霊井遺跡関連遺物の調査 / 科学研究費
- 国武 貞克：カザフスタン / '17.8.4 ~ 8.21 / カザフスタンにおける旧石器資料調査 / 科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア / '17.8.6 ~ 8.20 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 / 運営費交付金
- 山口 欧志：モンゴル / '17.8.10 ~ 8.16 / モンゴル国世界文化遺産関連遺跡の調査 / 科学研究費
- 山藤 正敏：キルギス / '17.8.10 ~ 8.21 / アク・ベシム遺跡出土資料の調査 / 科学研究費
- 丹羽 崇史：中国 / '17.8.11 ~ 8.17 / 冶金関連資料の調査 / 科学研究費
- 高妻 洋成：中国 / '17.8.23 ~ 8.25 / 東アジア文化遺産保存学会への参加 / 運営費交付金
- 金 旻貞：中国 / '17.8.23 ~ 8.26 / 東アジア文化遺産保存学会発表および参加 / 科学研究費
- 庄田 慎矢：韓国 / '17.8.23 ~ 8.26 / 共同研究の打ち合わせ / 渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担
- 丹羽 崇史：台湾 / '17.8.23 ~ 8.28 / アジア鑄造技術史学会台北大会への参加、および資料調査 / 科学研究費
- 田村 朋美：台湾 / '17.8.24 ~ 8.27 / アジア鑄造技術史学会台北大会に出席 / 科学研究費
- 小田 裕樹：中国 / '17.8.26 ~ 9.8 / 「東アジアにおける都城と葬地の政治的・社会的関連に関する比較史的総合研究」の一環として、国際シンポジウムおよび唐皇帝陵の踏査 / 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア / '17.8.28 ~ 9.3 / 西トップ遺跡の調査と修復 / 助成金
- 佐藤 由似：カンボジア / '17.8.30 ~ 9.4 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 / 運営費交付金
- 庄田 慎矢：イギリス / '17.9.4 ~ 9.11 / 研究打ち合わせ、学会参加 / 科学研究費
- 山口 欧志：モンゴル / '17.9.7 ~ 9.12 / 科学研究費による研究のため / 科学研究費
- 田村 朋美：モンゴル / '17.9.10 ~ 9.15 / モンゴル出土ガラス製遺物の調査 / 他機関負担
- 鈴木 智大：中国 / '17.9.11 ~ 9.17 / 中国浙江省における古建築調査 / 科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア / '17.9.13 ~ 9.21 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 / 運営費交付金
- 浦 蓉子：中国 / '17.9.13 ~ 9.24 / 中国田螺山遺跡の木製品調査 / 科学研究費
- 今井 晃樹：中国 / '17.9.16 ~ 9.24 / 北魏洛陽宮城出土遺物の調査 / 運営費交付金
- 岩戸 晶子：中国 / '17.9.16 ~ 9.24 / 北魏洛陽宮城出土遺物の調査 / 運営費交付金
- 清野 陽一：中国 / '17.9.16 ~ 9.24 / 北魏洛陽宮城出土遺物の調査 / 運営費交付金
- 栗山 雅夫：中国 / '17.9.16 ~ 9.24 / 北魏洛陽宮城出土遺物の調査 / 運営費交付金
- 脇谷 草一郎：ドイツ / '17.9.17 ~ 9.24 / 国際共同研究申請に関する会議、およびSWBSS2017に出席する / 渡航費：寄附金・滞在費：運営費交付金
- 庄田 慎矢：中国 / '17.9.19 ~ 9.23 / 資料調査、研究打ち合わせ / 科学研究費
- 石田 由紀子：韓国 / '17.9.21 ~ 9.25 / 古代の測量技術と尺度に関する資料調査 / 他機関科学研究費
- 国武 貞克：カザフスタン / '17.9.23 ~ 11.4 / カザフスタンにおける旧石器資料調査 / 科学研究費
- 丹羽 崇史：中国 / '17.10.7 ~ 10.9 / 資料見学 / 助成金
- 丹羽 崇史：韓国 / '17.10.15 ~ 10.19 / BUMAIX (第9回治金史学会) への参加・発表 / 科学研究費
- 海野 聡：韓国 / '17.10.17 ~ 10.20 / 古都の世界遺産に関する国際学術会議での講演 / 先方負担
- 廣瀬 覚：中国 / '17.10.17 ~ 10.21 / 遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」のため / 渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担
- 大澤 正吾：中国 / '17.10.17 ~ 10.21 / 遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」のため / 渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担
- 諫早 直人：中国 / '17.10.17 ~ 10.21 / 遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」のため / 渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担
- 小池 伸彦：中国 / '17.10.17 ~ 10.21 / 遼寧省文物考古研究所との国際共同研究

「三燕文化出土遺物の研究」のため／運営費交付金

●栗山 雅夫：中国／'17.10.17～10.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」のため／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●渡邊 晃宏：韓国／'17.10.18～10.21／韓国木簡学会・国立慶州文化財研究所共催国際学術大会／先方負担

●森本 晋：イタリア／'17.10.21～10.27／世界遺産歴史都市の保全状況調査／運営費交付金

●杉山 洋：カンボジア／'17.10.23～11.1／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金

●丹羽 崇史：韓国／'17.10.23～12.15／日韓発掘交流への参加／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●佐藤 由似：ベトナム／'17.10.26～10.30／ビンディン陶磁器に関する国際会議での発表／運営費交付金

●内田 和伸：韓国／'17.10.30～11.3／韓国国立文化財研究所との共同研究／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●中島 義晴：韓国／'17.10.30～11.3／韓国国立文化財研究所との共同研究／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●MARES Emmanuel：韓国／'17.10.30～11.3／韓国国立文化財研究所との共同研究／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●清野 孝之：韓国／'17.10.31～11.3／慶州古代寺院における出土瓦の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●岩戸 晶子：韓国／'17.10.31～11.3／慶州古代寺院における出土瓦の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●清野 陽一：韓国／'17.10.31～11.3／慶州古代寺院における出土瓦の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●森本 晋：台湾／'17.11.7～11.10／PNC（太平洋近隣友好協会）大会での研究発表／運営費交付金

●山口 欧志：インドネシア／'17.11.9～11.13／ボロブドゥール寺院等の三次元計測／他機関負担

●中村 一郎：ネパール／'17.11.12～11.22／ACCUユネスコ・アジア文化センター主催ワークショップ／先方負担

●石橋 茂登：韓国／'17.11.13～11.16／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●廣瀬 覚：韓国／'17.11.13～11.17／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／渡航費：運営費交付金・滞

在費：先方負担

●諫早 直人：韓国／'17.11.13～11.17／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●高田 祐一：韓国／'17.11.13～11.17／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●佐藤 由似：カンボジア／'17.11.14～11.17／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●箱崎 和久：中国／'17.11.17～11.24／山西省歴史的建造物調査・河北省遺跡調査／科学研究費

●海野 聡：中国／'17.11.17～11.24／山西省歴史的建造物調査・河北省遺跡調査／科学研究費

●加藤 真二：中国／'17.11.20～11.24／霊井関連遺跡出土品の調査／科学研究費

●杉山 洋：カンボジア／'17.11.22～12.1／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金

●廣瀬 覚：韓国／'17.11.26～11.29／「朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史」の第3回共同研究会への参加／先方負担

●森本 晋：カンボジア／'17.11.28～12.2／西トップ遺跡の調査／他機関科研費

●佐藤 由似：カンボジア／'17.12.8～12.15／ICCアンコール遺跡国際調整会議への出席／運営費交付金

●森本 晋：ミャンマー／'17.12.8～12.16／測量研修の補助／受託

●山藤 正敏：ミャンマー／'17.12.8～12.16／測量研修の補助／受託

●影山 悦子：ミャンマー／'17.12.8～12.16／測量研修の補助／受託

●渡邊 晃宏：中国／'17.12.11～12.12／中国社会科学院考古研究所との友好議定書、共同研究についての協議／運営費交付金

●今井 晃樹：中国／'17.12.11～12.14／中国社会科学院考古研究所との友好議定書、共同研究についての協議／運営費交付金

●神野 恵：中国／'17.12.18～12.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●森川 実：中国／'17.12.18～12.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●丹羽 崇史：中国／'17.12.18～12.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●山藤 正敏：中国／'17.12.18～12.22／

共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●杉山 洋：カンボジア／'17.12.18～12.26／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金

●田村 朋美：ロシア／'17.12.22～12.29／「物質文化と精神文化の交流と断絶から見た海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究」による海外学術調査／他機関科研費

●佐藤 由似：カンボジア／'17.12.24～12.30／西トップ遺跡の調査／運営費交付金

●丹羽 崇史：中国／'17.12.27～1.2／資料調査／助成金

●加藤 真二：中国／'18.1.2～1.7／霊井関連遺跡出土品の調査・調整／科学研究費

●海野 聡：韓国／'18.1.10～1.13／韓国の歴史的建造物と建築の表象に関する調査／科学研究費

●佐藤 由似：カンボジア、ミャンマー／'18.1.10～2.13／ポスト・アンコール期の調査、国際協力拠点交流／科学研究費、受託

●杉山 洋：カンボジア／'18.1.22～2.3／招へい者の選考と西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金

●田村 朋美：ベトナム／'18.1.24～1.30／ベトナム南部オケオ遺跡出土ガラス資料の実見、および遺跡の踏査／他機関負担

●島田 敏男：カンボジア／'18.1.27～2.1／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●影山 悦子：ミャンマー／'18.2.6～2.12／窯跡・陶磁器の調査研修の補助／受託

●森本 晋：ミャンマー／'18.2.6～2.12／窯跡・陶磁器の調査研修／受託

●丹羽 崇史：中国／'18.2.10～2.12／資料見学／助成金

●杉山 洋：カンボジア／'18.2.22～2.26／西トップ遺跡にかかる建築学的調査／運営費交付金

●高田 祐一：イギリス／'18.2.23～3.2／文化財情報発信に関する協議／運営費交付金

●国武 貞克：イギリス／'18.2.23～3.2／文化財情報発信に関する協議／運営費交付金

●小沼 美結：イギリス／'18.2.23～3.2／文化財情報発信に関する協議／科学研究費

●石橋 茂登：韓国／'18.2.25～2.28／大韓民国における古代十二支像の事例調査／受託

●金 旻貞：韓国／'18.2.25～2.28／大韓民国における古代十二支像の事例調査／受託

●森本 晋：台湾／'18.2.25～3.1／中央研

究院での陶磁器と写真技術に関する調査／運営費交付金

●栗山 雅夫：台湾／'18.2.25～3.1／中央研究院での陶磁器と写真技術に関する調査／運営費交付金

●佐藤 由似：台湾／'18.2.25～3.1／中央研究院での陶磁器と写真技術に関する調査／運営費交付金

●影山 悦子：ウズベキスタン／'18.2.25～3.5／ポスト・クシャー朝期の遺物の調査、記録／科学研究費、助成金

●中島 志保：中国／'18.2.27～3.2／固着した資料の処理方法に関する情報収集／運営費交付金

●森本 晋：ベルギー・フランス／'18.3.6～3.11／計量基準資料の調査／運営費交付金

●海野 聡：ブータン・タイ／'18.3.7～3.15／ブータン王国・タイ建造物調査／科学研究費分担金

●渡邊 晃宏：韓国／'18.3.8～3.10／2018 耽羅史国際学術大会への参加・招待報告／先方負担

●杉山 洋：韓国／'18.3.8～3.10／2018 耽羅史国際学術大会への参加・招待報告／先方負担

●庄田 慎矢：中国／'18.3.11～3.18／研究打ち合わせ、資料調査、試料採取／科学研究費

●渡邊 晃宏：韓国／'18.3.12～3.15／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●馬場 基：韓国／'18.3.12～3.15／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●方 国花：韓国／'18.3.12～3.15／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●玉田 芳英：中国／'18.3.12～3.16／唐代古墳壁画の保存活用事例の調査／受託

●石橋 茂登：中国／'18.3.12～3.16／唐代古墳壁画の保存活用事例の調査／受託

●栗山 雅夫：中国／'18.3.12～3.16／唐代古墳壁画の保存活用事例の調査／受託

●中田 愛乃：中国／'18.3.12～3.16／唐代古墳壁画の保存活用事例の調査／受託

●佐藤 由似：カンボジア／'18.3.14～3.17／西トップ遺跡の調査／運営費交付金

●諫早 直人：韓国／'18.3.15～3.17／国立伽耶文化財研究所が主催する学術大会における発表／先方負担

●山藤 正敏：キルギス／'18.3.19～3.23／キルギス共和国アク・ベシム遺跡出土資

料の調査／科学研究費

●小田 裕樹：韓国／'18.3.25～3.29／日韓共同研究の一環として、百済（泗泚期）の土器の実見調査、遺跡見学および朝鮮時代の宮中・両班階級の食膳・調理事例の調査／運営費交付金

●芝 康次郎：韓国／'18.3.25～3.29／日韓共同研究の一環として、百済（泗泚期）の土器の実見調査、遺跡見学および朝鮮時代の宮中・両班階級の食膳・調理事例の調査／運営費交付金

●山藤 正敏：韓国／'18.3.25～3.29／日韓共同研究の一環として、百済（泗泚期）の土器の実見調査、遺跡見学および朝鮮時代の宮中・両班階級の食膳・調理事例の調査／運営費交付金

●大澤 正吾：韓国／'18.3.25～3.29／日韓共同研究の一環として、百済（泗泚期）の土器の実見調査、遺跡見学および朝鮮時代の宮中・両班階級の食膳・調理事例の調査／運営費交付金

●国武 貞克：カザフスタン／'18.3.27～4.7／カザフスタンにおける旧石器資料調査／先方負担

公開講演会

第9回東京講演会（有楽町朝日ホール）

2017年10月7日

◆森本 晋「奈文研のデータベース」

奈良文化財研究所ではコンピューター導入以前から、情報の整理に工夫をこらしていた。平城宮跡のような大規模な遺跡では、長期に渡り継続的に調査していくので、記録をカード化する等、遺構や遺物の記録の体系化がはかられていた。パソコンの普及によってそれらの情報を効率的に処理して提供できるようになった。現在、奈文研はインターネットを通じて多くのデータベースを公開している。文化財のデータベースは、順次蓄積していくため総量が増え続けるという特質がある。また、最近のシステムには、全文検索や横断検索の活用、大規模データによる今までにない分析視点の創出といった特徴がある。文化財に関する記録の整理・活用と管理・継承のためにさらにデータベースの整備を進め、その成果を公開していきたい。

◆高田 祐一「全国遺跡報告総覧と考古学ビッグデータ」

考古学は、蓄積型の学問であって、過去の調査研究事例の蓄積が重要である。着実な文化財保護行政の推進によって、膨大な調査成果が報告されている。しかし情報が

多すぎて探せないという情報爆発の弊害もでてきた。その解決策の一つとして、報告書のインデックスの機能を果たしうる全国遺跡報告総覧について現状と可能性を紹介した。全文検索機能、ほかの情報基盤とのデータ連携機能、自然言語処理技術を応用した機能等について解説した。全国遺跡報告総覧に登録されているデータは、考古学ビッグデータとして、今後大きな可能性を秘めていることを述べた。

◆渡辺 晃宏「木簡データベースの高次化とMOJIZO」

木簡の文字画像データベース「木簡字典」の開発着手から足かけ15年になる2017年、スマホ・タブレット版MOJIZOの公開により、木簡に関するデータベースは新しい段階を迎えた。そこで、木簡の資料としての特質を概観して、木簡データベースが必要となった経緯も紹介しつつ、PC普及前の1980年代の黎明期、1988・89年の長屋王家木簡・二条大路木簡の発見から1999年の木簡データベース公開にいたるテキストデータベースの確立期、そして2005年公開の「木簡字典」からMOJIZOにいたる文字画像データベースの構築、および東京大学史料編纂所「電子くずし字字典データベース」との連携検索や関連データベース群の充実等を含む発展期へという、これまでの木簡関連データベース開発の歩みを辿り、あわせて木簡データベースの今後の可能性を展望した。

◆廣瀬 覚「デジタルデータでみる高松塚古墳」

2017年は、高松塚古墳の石室解体事業が完了して10年目の節目の年であった。石室解体にともなう発掘調査では、石室の構造はもとより、古墳の構築過程に関する情報を細大漏らさず収集すべく、手作業での記録に加えて、3次元計測によるデジタルデータの収集にも取り組んだ。

本発表では、一連の事業を通じて奈良文化財研究所が取り組んだ高松塚古墳のデジタルでの記録作業、およびその活用について報告した。写真や実測、拓本といった従来の記録方法と比較しながら、石室の構造や石材の加工痕跡等を3次元で計測・記録する利点を紹介した。また、発掘調査時に取得した3次元データから作成したCG動画コンテンツを用いて、高松塚古墳の構築過程の全体像を一般の方にもわかりやすく解説した。

◆山口 政志「文化財のデジタル文化資源化：見たままの姿を伝え、深層を探る」

近年、文化財を将来にわたり守り伝え活かす取組の重要性が増している。ただし、実直な取組には文化財に対する深い理解が不可欠であり、その理解は文化財の調査研究・保存保護・活用の体系的な蓄積によってこそ得られる。文化財のデジタル文化資源化はこれを実現する方策の一つであり、その一環としてデジタル技術も使った文化財の資料化（記録・収集・整理・蓄積・発信・活用）を進めている。そこでこれまでの国内外での調査研究の事例を紹介し、常により適切な方法を考え続けることが大切だと述べ、今後の可能性を展望した。

◆村田 泰輔「発掘された歴史的地震・火山災害痕跡データベース：考古学の新たな挑戦」

文部科学省の建議「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」にもとづく「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」（地震・火山噴火予知協議会）の要請にしたがい、奈良文化財研究所が2014年度より取り組んでいる「考古資料および文献史料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」事業について、その取組や課題、将来展望を具体的な事例を交えて説明し、私たちの将来に向けた防災・減災活動の重要性を訴えた。

第120回公開講演会

2017年6月17日

◆浦 蓉子「橋はあったのか？ —朱雀門周辺の発掘成果の紹介—」

2016年度の朱雀大路ならびに二条大路の整備にともなう発掘調査成果について講演をおこなった。朱雀大路と二条大路の交差点という主要地点の発掘では、橋の有無が焦点となった。成果として、朱雀大路の幅約3.5mの西側溝が二条大路を横断していること、にもかかわらず橋脚や橋の部材といった直接的に橋の痕跡を示すものが出土しなかったことを確認し、かわりに二条大路の中軸とその南北に計画的に配置された3ヵ所の張出を確認した。これらの計画的に配置された張出について、平城京内の橋の事例や、張出遺構の類例をあげながらどのように解釈することができるか検討を加え紹介した。

◆前川 歩「古代建築にみる近代」

古代建築といえども、中世や近世の考えや技術が投入され、そうした技術の集積の上に1,000年以上残ってきた。こうした状

況は近代以降も同様であるが、近世までの伝統的なやりかたとは異なる手法が持ち込まれることとなる。近代的な修理工事手法が確立を迎える昭和初期にそれは顕著となる。本報告では、古建築の構造的欠陥を補強するために導入された、工学技術の受容過程に特に注目し、近代的思想、技術が古建築修理にどのように介入し、受容されていたのか、その一端を報告した。

◆清野 陽一「デジタル地図で読む古代人の「旅」」

地理情報システム（Geographic Information System: GIS）を考古学および日本古代史研究に応用する一事例として、古代交通研究における、移動時間（厳密には時間で表現されるコスト）の比較研究について、これまで発表者がおこなってきた研究を紹介し、今後の課題についても検討した。

考古学におけるGIS利用は様々な応用が考えられるが、数多くの制約条件により、日本ではこれまで、遺跡に関わる空間情報の管理に活用される事例が主流だった。近年、パーソナル・コンピュータの性能が飛躍的に向上し、また地理空間情報のデジタル化も進展したため、高度な空間分析も個人研究者の手元でおこなえるようになってきた。

発表では、まず日本古代の史料中に記載された人の移動に関する情報をいくつか紹介した。そして、近年、考古学等の研究の進展により、古代道路や官衙の位置が数多くあきらかにされてきていることから、そうした成果も援用して、実際の史料中で描かれる古代の移動ルートをデジタル地理空間情報中で再現した。最後に、そのルートを移動するのに要したとされる史料中の記載と、シミュレーション結果の比較を通して、ルートの妥当性や、移動に関わる諸問題について検討をおこない、今後の課題についても整理した。

第121回公開講演会

2017年11月11日

◆松村 恵司「古代の銭貨生産技術」

銭貨を円滑に流通させるためには、均質な銭貨の大量生産技術が不可欠である。古代の銭貨生産は鑄造司が担当し、鑄造技法によって規格性の高い銭貨の量産化を実現した。富本銭と和同開珎の鑄造遺跡から出土した遺物の分析と、平安時代の銭貨改鑄に関する史料や、江戸時代の寛永通宝（1636年発行）の銭座の作業風景を描いた絵図との比較作業を通して、かなり具体的に古代の銭貨生産技術と製作工程を復元できるようにになった。その成果を紹介すると

ともに、和同開珎の発行に向けて、より効率的な銭貨生産を目指した技術改良の知恵と工夫について言及した。

◆大澤 正吾「藤原宮の造営と下層運河SD1901A」

藤原宮の下層には大規模な南北溝SD1901Aが貫流し、藤原宮造営のための資材を運搬する運河と考えられている。2015年度の飛鳥藤原第186次調査でもこの運河SD1901Aを発掘し、考古学的な検討に加えて地質学的分析や、木製品・木質遺物、葉片、種実、花粉の植物種の分析をおこなった結果、より詳細な運河機能時の姿を描くことが可能になった。その成果を講演するとともに、飛鳥京跡、石神遺跡、SD1901A出土須恵器食器の比較からみえてきた、飛鳥浄御原宮期における宮殿、宮外官衙、藤原宮造営現場という遺跡の性格差による土器様相の違いについても説明した。

◆岩戸 晶子「表現された古（いにしえ）の建築」

日本では古い時代に遡る建築を表現した資料が比較的多く遺存する。先史時代の建築表現は特別な技能を備えた限られた集団の手によるもので、祭祠や王権との関わりが色濃い。いっぽう、仏教伝来以降は厨子や仏教絵画等仏教思想の一要素としての建築表現が主流となる。平安時代に絵巻物が登場すると権力や宗教に関わる特別な意義は失われ、様々な建物が表現されるようになっていく。縄文時代から平安時代における考古資料ならびに彫刻・絵画資料等様々な「建築表現」の遺例を紹介しつつ、古代日本における建築表現の持つ意義の画期と変遷について通観した。

研究集会

◆古代官衙・集落研究集会（第21回）

2017年12月8日～9日

2017年度は「地方官衙政庁域の変遷と特質」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、海野聡「国庁正殿と郡庁正殿・国分寺金堂の比較にみる建築の格式と荘厳性」、廣谷和也氏「多賀城政庁と周辺城柵・郡衙の政庁域の変遷と特質」、箕輪健一氏「常陸国庁と周辺郡衙の政庁域の変遷と特質」、志賀崇氏「出雲国庁と周辺郡衙の政庁域の変遷と特質」、杉原敏之氏「大宰府管内における政庁域の構造と特質」、古尾谷知浩氏「文献からみた国・郡・寺院の「庁」における政務とクラ」、

李陽浩氏「国庁・郡庁建築と前期難波宮」の計7本である。発表終了後、李陽浩氏の司会による総合討議をおこない、各地における国庁・郡庁の変遷の様相と歴史的特質に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計144名で、アンケートでは96%が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究会の研究報告を2018年度に刊行する予定である。

このほか、2016年度に実施した研究会の研究報告『郡庁域の空間構成』を2017年12月に刊行した。(小田 裕樹)

◆文化的景観研究会(第9回)

2017年12月9～10日

「地域らしさを支える土木—文化的景観における公共事業の整え方—」をテーマに開催した。参加者は105名であった。

初日は京都府立大学多目的ホールを会場に、研究者や自治体職員の方々から4つの報告をいただき、パネルディスカッションをおこなった。あわせてポスターセッションも実施し、18件の発表があった。

2日目は「琵琶湖南東岸の水郷地帯」のエクスカッションを実施した。滋賀県東近江市伊庭の水郷集落や近江八幡市安土町のヨシ葺き屋根職人の工場を訪ね、現地で見聞交換をおこなった。(恵谷 浩子)

◆遺跡整備・活用研究会

2017年12月22日

2017年度は「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」をテーマとして遺跡整備活用研究会を開催した。発表者と内容は、基調報告として村上裕道氏(文化庁地域文化創生本部)「文化庁のまちづくり・観光に関わる施策について」、以下、事例報告として、立石堅志氏(奈良市教育総務部文化財課)「史跡等を活かした地域づくり・観光振興—奈良市の事例—」、城戸康利氏(太宰府市教育委員会文化財課)「史跡等を活かした地域づくり・観光振興—太宰府市の場合—」、米本潔氏(鳥根県津和野町商工観光課・津和野町教育委員会)「名勝田堀氏庭園の整備と活用における文化財の観光資源としての活用について」、長谷川明洋氏(米子市上淀白鳳の丘展示館)「彼岸花の里づくりプロジェクト事業の現状と課題—国史跡上淀廃寺跡を彼岸花の咲く丘に—」、松尾法博氏(佐賀県立名護屋城博物館学芸課)「特別史跡名護屋城跡並びに陣跡等を活かした地域づくり・観光振興—佐賀県立名護屋城博物館の新たな試み—」であった。

総合討議をおこない、文化財担当部局が

首長部局にある場合等の現状と課題を共有することができた。(内田 和伸)

◆古代瓦研究会(第18回)

2018年2月3～4日

「8世紀の瓦づくりⅦ—一本づくり・一枚づくりの展開—」をテーマとして、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂においてシンポジウムを開催した。参加者は地方公共団体・大学・研究機関関係者等247名である。3日は、梶原義実氏(名古屋大学大学院)による講演の後、岩戸晶子が大和、新田剛氏(鈴鹿市文化スポーツ部)が東海地方西部、前田清彦氏(豊川市教育委員会)が東海地方東部、三好清超氏(飛騨市教育委員会)が中部地方、4日は、昼間孝志氏((公財)埼玉埋蔵文化財調査事業団)が関東地方西部、山路直充氏(市立市川考古博物館)が関東地方東部、藤木海氏(南相馬市教育委員会)が東北地方の状況を報告し、合わせて資料観察会をおこなった。また、神田和彦氏(秋田市教育委員会)・佐川正敏氏(東北学院大学)・吉野武氏(宮城県多賀城跡調査研究所)・水戸部秀樹氏(山形県埋蔵文化財センター)が東北地方、松葉竜司氏(美浜町教育委員会)・中原義史氏(福井県教育庁埋蔵文化財センター)・熊谷葉月氏((公財)石川県埋蔵文化財センター)・西井龍儀氏((株)新建築設計事務所)・春日真実氏((公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団)が北陸地方の状況を紙上で報告した。4日午後には、清野孝之の司会により総合討議をおこない、各地における軒丸瓦の一本づくり技法、軒平瓦・平瓦の一枚づくり技法の特徴、年代観、技術の系譜等とそれらの導入の背景について活発な議論が交わされた。

なお、今回のシンポジウムの成果は、2020年度に刊行する予定である。

(清野 孝之)

◆保存科学研究集会

2018年3月9日

金属製遺物、とりわけ鉄製品は展示・保管環境下でのトラブルが多く、保存科学上しばしば問題となる。また近年、分析技術の向上にともない、自然科学的手法による遺物の分析が広く実施されるようになったことから、その原理や解釈法に関する情報の共有化が望まれる。そこで、今年度は「金属製遺物の調査・研究に関する最近の動向」と題して、展示・保管環境や埋蔵環境が金属製遺物の劣化におよぼす影響や、非破壊分析の原理と得られたデータの解釈法、さらには古代の製作技法に関する研究から計5件の研究発表、および関連する分

野から計8件のポスター発表をおこなった。また、総合討議では遺物の展示・保管に実務として関わる方々や、遺物の科学分析を実施している考古学の専門家と上記のテーマについて議論をおこない、情報の共有化のみならず学際的な交流を深める機会となった。(脇谷 草一郎)

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究(S) 継続

1) 削屑のガラス板画像に註記を追加できるツール(MokkAnnotator I)に続き、形のある断面画像に註記情報を加え蓄積・分類できるツール(MokkAnnotator II)を開発した。2)『和名抄』所収の国郡郷名データに、木簡に見える地名データ約1,900件を加え、「古代地名検索システム」をリニューアルオープンした(2018年3月29日、(<http://chimei.nabunken.go.jp/>)。これにともない、検索語句の漢字・よみの自動識別を実現した。3) 木簡を検索する「木簡データベース」と、木簡の文字画像を検索する「木簡字典」とを、両者の長所そのままに統合し、新しい木簡データベース「木簡庫」として公開した(2018年3月22日、<http://mokkanko.nabunken.go.jp/>)。テキスト表示と画像表示の相互移動、法量や年紀の範囲指定検索、様々な絞り込みやリンク等の新機能を搭載し、木簡に関するデータベースの高次化を実現できた。

以上、木簡を主体とする出土文字資料に関する情報集約システムの構築という所期の目的を実現できた。

◆歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究

代表者・馬場 基 基盤研究(A) 継続

研究の最終年度にあたり、これまでの成果の総括をその公表手段の検討を中心に作業をおこなった。研究開始当初は、木簡画像データベース・木簡字典に研究成果を反映させることも想定していたが、木簡字典データベースの大規模な改良作業がおこなわれていたこともあり、本研究の成果は独自に蓄積を進めていくことにした。

また、研究成果をわかりやすく公表するため冊子の作成を企画した。出版社も決定し(八木書店)、原稿の入稿や調整作業を進めた。年度内刊行を目指したが、研究成果の見直し作業や、特にレイアウト等コン

テンツ（＝研究成果そのもの）以外の部分で制作の充実をはかる試みをおこなっていることもあり、年度内刊行は見送った。ただし近日中の刊行を予定している。

◆発掘遺構による古代寺院建築史の構築

代表者・箱崎 和久 基盤研究 (A) 継続

発掘調査で検出した古代寺院の遺構を集成し、それを分析するというオーソドックスな手法で古代建築史を見直そうというのが研究の大きな目的である。それとともに、近年の研究によって、地方寺院間や官衙との関係から、瓦の生産体制や流通についてもあきらかになってきている。発掘遺構の分析とともに、瓦研究の成果を総合して古代寺院建築史を検討したいと考えている。

2017年度は、2016年度に引き続き、発掘遺構の集成作業、および帰属遺構が判明する出土瓦の集成作業を重点的におこなった。発掘遺構の集成作業では、奈良文化財研究所が公開している古代寺院データベースを利用しながら、それまで残っていた中部地方、関東地方、東北地方の各一部の計11都県の収集をおこなった。その結果、11都県では124遺跡で寺院遺構を確認し、金堂が32件、講堂が26件、塔が27件、門が42件、食堂2件、付属院が5件等であった。その他の仏堂、すなわち平地寺院で検出した性格不明の仏堂、山林寺院で堂塔名を比定できないもの、あるいは村落内寺院における仏堂等は140件に達した。今後はデータベースの作成と分析を進めていく予定だが、山林寺院や村落内寺院の遺構についての対応を検討したい。

瓦資料の収集は、寺院関連と関連する官衙について、一通り全県の収集作業が終了した。北海道・青森・秋田・沖縄には古代寺院の瓦を確認できていない。その結果、寺院については560遺跡、官衙については90遺跡のデータを収集した。今後は類似の先行研究との整合等の検討をおこなっていきたい。

◆中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義

代表者・光谷 拓実 基盤研究 (B) 継続

2016年度までに中国漢代の木棺材（コウヨウザン）から計測、収集した年輪データをを用いて564年間分（BC6C～AD1C頃）の年輪パターンを作成した。2017年度はこれとは異なる年輪パターンとして241年間分を作成した。これはAMS法を用いた年代測定から、その暦年代は1 σ の暦年代範囲（確率68.2%）で1278～1311calADとなる結果が得られた。

本研究によって漢代（BC6C～AD1C）

と中世（宋～元）（AD11C～14C）の2種類の年輪パターンを作成することができた。

木槨・木棺材の用材選択の傾向については、漢代の木棺には広葉樹のPhoebe属の種と針葉樹のコウヨウザンの2樹種がほぼ大差なく利用されていたが、木槨にはPhoebe属の樹種が優先して使用されていたことが判明した。

◆弥生時代における青銅器生産の総合的研究

代表者・難波 洋三 基盤研究 (B) 継続

2017年度は、漢代の銅鏡7面と帯鈎3個の鉛同位体比測定とICP分析を実施し、これらが弥生時代の青銅器とほぼ同濃度のヒ素・アンチモン等を不純物として含んでいることを確認した。これにより、弥生時代の青銅器に含まれている銅を列島産自然銅と考える説を否定するデータは一層充実した。このほか、長野県柳沢遺跡出土の銅鐸5個と銅戈8本の鉛同位体比を測定し、大阪湾型銅戈a類に含まれている鉛が菱環鈕式や外縁付鈕1式の銅鐸の鉛と同じく朝鮮半島産であることを確認した。大阪湾型銅戈a類については、福田型銅鐸との類似を強調し、共に北部九州製の東方向け青銅器とする説があるが、両者の製作時期は大きく異なっておりこの説は成立しないと考える難波の従来の見解を、これによって裏付けることができた。

◆東大寺を中心とする南部の未整理文書聖教の復元的調査研究

代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 継続

4年目である2017年度は、新修東大寺文書聖教の第85函～第87函の調査データ入力、第44函等の写真撮影を実施した。また、東大寺所蔵の興福寺関係資料について、明治初年の日記の一部を翻刻した。

さらに、東大寺中性院が所蔵する襖・屏風の下張り文書について、糊を剥がし調査する作業と、そこからみいだした文書の検討を、研究分担者の横内裕人氏を中心となって実施した。

加えて、個人所蔵の興福寺関係資料について、悉皆的な整理・調査を実施し、その中にみいだした中世文書の写について検討を加えた。その他、奈良の旧家の個人蔵の歴史資料について、研究協力者の協力の下で、調査をおこなった。

◆アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築

代表者・杉山 洋 基盤研究 (B) 海外継続

2017年度には、アンコール遺跡群現地での西トップ遺跡の調査を継続するとともに、その後の王都であるロンヴェークでの調査もおこなった。西トップ遺跡での調査では2016年度に発見されたレンガ状遺構の、遺物調査や科学的分析をおこない、ポスト・バイオン期の14世紀後半から15世前半の遺構であることがあきらかになるとともに、この時期の埋葬儀礼に関する新知見を得ることができた。ロンヴェーク遺跡では王宮推定地での調査を継続し、掘立柱建物の検出によって、王宮の地点推定が可能となった。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

代表者・松村 恵司 基盤研究 (B) 継続

4ヶ年計画の3年目となる2017年度は、在地における和同開珎出土遺跡の性格を探るべく、奈良文化財研究所の「地方官衙関係遺跡データベース」と「古代寺院遺跡データベース」を利用して官衙関連遺跡の分布図を作成し、旧国単位に両者を比較対照する作業を進めた。また、「木簡データベース」をもとに、銭貨流通に関する木簡を抽出し、『日本古代貨幣関係史料集稿—出土木簡編』の編集作業に着手した。さらに無文銀銭の製作実験を実施し、銀片の貼付方法と重量調整法を検討した。

◆東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究—河南靈井遺跡出土品の徹底分析—

代表者・加藤 真二 基盤研究 (B) 海外継続

7月と11月に内蒙古、河北、北京に所在する諸機関で、霊井関連遺跡出土品を調査し、太行山脈以西や中国東北部小興安嶺山脈での旧石器・新石器移行期の石器群の様相を把握するとともに、必要な試料を採取した。また、熊本県、カザフスタンの関連遺跡で採取した炭化物の放射性炭素年代をAMS法で測定した。これにより、中央アジアから日本列島までの広い範囲で旧石器・新石器移行期に関わる新たな測定値を得たことになった。

2018年度には、これまでの調査や分析の成果をもとに報告書を取りまとめた。

◆木簡の年輪年代学：同一材推定による再釈読と荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線の構築

代表者・星野 安治 基盤研究 (B) 新規

木簡を対象とした年輪年代学的な同一材推定および荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線を構築することにより、木簡から考古資料としての新たな価値を引き出し、考古学・古代史学・年輪年代学が融合した研究を推進する。2017年度は、奈良文化財研究所都城発掘調査部平城第524次調査出土の木簡削屑を対象とした同一材推定を中心に調査を進めた。その結果、これまで不明確であった木簡削屑の新たな接合関係が見出され、書かれた文字の判読や解釈に資する等の成果が得られた。この成果の一部は学会においても速報的に発表し、日本文化財科学会第11回ポスター賞を受賞した。

◆中国由来の木彫像の用材観

代表者・伊東 隆夫 基盤研究 (C) 継続

2017年度は9月24日から29日まで、米国のフィラデルフィアにあるフィラデルフィア美術館を訪問し、同美術館所蔵の中国由来木彫像および日本の神像彫刻の計33体につき、Associate CuratorのHiromi Kinoshita氏、senior ConservatorのSally Malenka氏およびAssociate ConservatorのPeggy A. Olley氏の立会いと協力のもとに微量の木片試料を採取し、日本に持ち帰り、分析をおこなった。結果は以下の通りであった。中には2種類の木材が利用されている場合が2例あったので総計の数字は仏像の数を2件上回っている。

Tilia sp. 12体

Paulownia sp. 7体

Salix sp. 6体

Pinus subgen *Diploxylon* 2体

Lauraceae 2体

Abies sp. 1体

Pinus subgen *Haploxylon* 1体

Torreya nucifera 1体

Cladrastis sp. 1体

Magnolia sp. 1体

Populus sp. 1体

Diffuse-porous wood 1体

◆律令制下の土器生産—須恵器・土師器群別分類の再構築

代表者・神野 恵 基盤研究 (C) 継続

2017年度は尾張猿投窯や備前寒風窯等、比較的遠隔地の須恵器について、窯出土資料を収集した。これまで収集してきた須恵器の蛍光X線分析データの解析を進め、陶邑窯と奈良山の各窯出土資料の分別方法を検討した。平城宮・京から出土した年代の

定点となる須恵器資料のサンプリングを進めた。あわせて、平城京近郊を中心に生産された須恵器の器種や量法データの分析を進め、生産窯による器種の偏り等を整理した。また、今年度から土師器の生産地についても資料収集をはじめ、斎宮周辺等から出土した土器資料の収集をおこなった。

◆奈良時代鉛釉陶器および鉛釉瓦磚の基礎的研究

代表者・今井 晃樹 基盤研究 (C) 継続

2017年度は平城京出土の施釉陶器、瓦磚について考古学的観察や分布状況を分析した。具体的には、西大寺出土の施釉陶器、平城京左京二条二坊の施釉瓦磚の考古学的分析をおこない、それぞれの時期の特定や、時期ごとの変遷等をあきらかにした。このような成果をふまえ、10月21日に研究会を開催した。当日の報告は以下の通りである。

今井晃樹「平城京左京二条二坊の施釉瓦」

神野恵「西大寺食堂院井戸SE950出土の奈良三彩陶器の再整理」

岡田雅彦氏（奈良県教育委員会）「唐招提寺出土の施釉瓦」

降幡順子氏（京都国立博物館）「平城京寺院出土の施釉陶器瓦磚の分析」

研究会では多くの専門化からの意見をいただくとともに、施釉陶器や瓦磚を実見しながら様々な問題について議論をした。また、昨年度に引き続き平城京内の寺院出土の瓦磚の胎土分析を実施し、関西地方の施釉陶器、瓦磚のデータベースを作成した。

◆古代の灯火—先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究

代表者・深澤 芳樹 基盤研究 (C) 継続

本研究では、光を生み出す人工的なしくみを灯明具と呼ぶ。現代にいたるまでその多くは、有機成分が酸化したときにおきる発光現象を利用してきた。樹木を燃やす松明等は、その例である。しかしこれは野外においては有効であっても、室内では燃焼の持続時間と発光量、それに管理の問題から、不適當であった。飛鳥時代以降日本列島にあらわれる、植物油料を燃料にして、灯心で発光させる灯明具は、この問題を解決したといえよう。

この実態を、大韓民国金武重氏を招いて、韓国の照明具に関する意見交換をおこなった。また、本年度は、近世から近代に油屋を営んでいた油屋の油壺について、詳細な調査をおこなうとともに、新潟県津南町立歴史民俗資料館において民俗資料の調査を実施した。

◆飛鳥時代金属製品の加工技術に関する基礎的研究

代表者・石橋 茂登 基盤研究 (C) 継続

飛鳥時代の金属製品に関して、加工技術の調査を主眼として、飛鳥寺跡出土品、山田寺跡出土品、川原寺跡出土品等を調査した。ルーベ等による観察のほか、一部の計測、蛍光X線分析、鉛同位体比分析等を実施した。また飛鳥寺跡の蛇行状鉄器残欠は、他の事例と比較検討することで本来形状の推定復元をおこなった。成果の詳細は論文等で発表する予定である。

飛鳥寺跡出土金銅製打出金具は銅板を用いた製作実験を実施した。その結果、単に工具を打ち込むだけでは銅板に実物同様の鮮明な文様を打ち出すのはかなり難しいことがわかり、厚手の銅板で打出金具を再現するためには技術的課題の存在があきらかとなった。

◆埋蔵環境下における金属製遺物の現地保存法の開発

代表者・脇谷 草一郎 基盤研究 (C) 継続

本研究では、1) 遺跡地盤内部における熱・水分・物質（酸素）移動の数値解析から地盤内部の温度、含水率、酸化還元環境、すなわち遺物の埋蔵環境を推定するモデルの構築と、2) 土壌カラム実験において金属試料の分極抵抗を測定することで、土壌の含水状態と酸化還元環境が金属の腐食挙動におよぼす影響を定量的に把握し、これらの結果から埋蔵環境下での金属製遺物の腐食速度のモデル化を試みる。2017年度はガラスビーズを用いたカラム実験を実施した。その結果、金属試料の腐食に対しては溶存酸素濃度が大きく影響をおよぼすこと、その濃度分布に対してはガラスビーズの飽和度が支配的であることが認められた。次年度は引き続きカラム実験を実施するとともに、モデル化に着手する。

◆蛍光X線分析と鉱物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究

代表者・清野 孝之 基盤研究 (C) 継続

本研究は、飛鳥藤原地区出土瓦と同範または深い関わりが推定される瓦について、理化学的分析（蛍光X線分析、鉱物組成分析）、考古学的調査を合わせておこない、その生産と供給の実態をあきらかにしようとするものである。研究期間の2年目に当たる2017年度は、藤原宮出土瓦と同範の香川県宗吉瓦窯出土軒瓦（6278B・6647D）、徳島県石井町石井廃寺出土軒瓦（6278C）、大阪府堺市浜寺石津町東遺跡出土軒平瓦（6647A）、兵庫県洲本市土

生寺窯表採軒平瓦（6646E・F）、兵庫県淡路市志筑廃寺出土軒丸瓦（6279B）等の調査をおこない、藤原宮所用瓦の生産の様相を把握するための手がかりを得た。

◆6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究—奈良盆地を中心に—

代表者・廣瀬 寛 基盤研究 (C) 継続

本研究は、律令国家成立以前の支配制度の一つであり、従来は文献史学を中心に研究がなされてきた「部民制」について、近年、飛躍的に深化している埴輪生産組織の復元研究にもとづいて、考古学からその実態をあきらかにすることを目的とする。

2年目となる2017年は、奈良盆地およびその周辺地域を対象に、5世紀後半から6世紀代にかけての埴輪の実見を進めるとともに、「部民制」およびそれに先行する「人制」に関する文献史学の近年の研究状況について整理をおこなった。

また、昨年に引き続き、奈良文化財研究所所蔵の木津川市音乗谷古墳出土埴輪を用いて3次元計測による埴輪のデータ化とそれを用いた生産組織の分析方法について検討をおこなった。

◆明治～戦前期の木造建築に使われた良材の産地とその年輪データに関する基礎的研究

代表者・藤井 裕之 基盤研究 (C) 継続

4ヵ年計画の2年目にあたる2017年度はデータの収集と計測を本格的に開始し、おもに四国西部（愛媛県、高知県）と山形県庄内地方の物件を対象に作業を進めた。このうち愛媛県の物件では、建築の場所やいきさが異なる当該期の2棟の建物で、スギ製とみられる天井板の年輪パターンが同調している事例を把握できた。これらと同調する現生木のパターンはいまのところ見当たらず、未知の産地からもたらされた可能性が高い。これで本研究課題のねらいがひとつ達成できたことになるが、2棟のパターンを具体的な地名とどのように結びつけられるか、さらなる難題が待ち構えている。

上記に加え、新たに新潟県において調査対象物件の探索を開始した。かねてより東日本方面で集めてきた年輪データや木材入手にまつわるエピソードに、この地域に関わる例がいくつかあることを重視した。具体的な年輪パターンの把握につなげたい。

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健 基盤研究 (C) 新規

本研究の目的は、遺跡から出土した食料

残滓から、古代における食生活をあきらかにすることである。2017年度は、古代の遺跡から出土した動物遺存体を集成するとともに、事例として千葉県域の研究を進めた。その結果、文字資料に残りにくい地方における食生活の実態や海産物の流通をあきらかにすることができた。

こうした成果については、近江貝塚研究会で「古代における貝類利用の実態—房総地域の事例研究—」と題した口頭発表をおこなうとともに、『条里制・古代都市研究』第33号に論文を執筆した。

◆Sr同位体比分析による日本出土「ナトロンガラス」の産地に関する考古学的研究

代表者・田村 朋美 基盤研究 (C) 新規

古代ガラスにはストロンチウム (Sr) が100～500ppm含まれており、地中海周辺地域の出土品を中心にSr同位体比による産地推定がおこなわれている。いっぽう、日本出土品でSr同位体比分析がおこなわれた例はほとんどない。本研究は、日本出土のガラス製造物のSr同位体比分析を実施し、これまで特定することのできなかった生産地の特定を目指すものである。2017年度は、化学組成において地中海周辺地域で生産された可能性の高いナトロンガラス (Group SI) を分析対象とした。さらに、主成分はナトロンガラスに類似するものの、微量成分や製作技法から判断すると南～東南アジア産と考えられる「ナトロン主体ガラス」(Group SIV) も調査した。その結果、Group SIは確かに地中海周辺地域で生産された「ナトロンガラス」であるが、Group SIVは真正の「ナトロンガラス」ではないことが確認された。さらに、日本出土のナトロンガラスの多くは、現在のイスラエル周辺で生産された可能性が高いことがあきらかとなった。

◆展示施設を拠点とする地域住民参加型の歴史的建造物の調査

代表者・西田 紀子 基盤研究 (C) 新規

本研究では、展示施設のもつ特徴と、地域住民の知恵やネットワークを活かして、協同して当該地域の歴史的建造物を調査、研究することを目的とする。初年度となる2017年度は、明日香村の歴史的建造物の残存状況を調べるため、5つの大字を踏査した。明日香村教育委員会および地元自治会・関係者から情報収集や聞取調査の協力を得た。また2件の物件について、単体調査を実施した（1棟は平常空家・1棟は調査直後取り壊し）。

また、明日香村と岡大字が所蔵する近代

の地籍図を調査した。調査成果については、飛鳥資料館春期特別展『あすかの原風景』の展示および『奈文研紀要2019』の報告で公開した。

◆中央アジア西部ポスト・クシャーン朝 (4～7世紀) 壁画の基礎的研究

代表者・影山 悦子 基盤研究 (C) 新規

本研究は、ガンダーラ美術に用いられる「ポスト・クシャーン朝」という時代区分を中央アジア西部の美術に応用し、キターラ、エフタル、西突厥がこの地域を支配した時代の美術を特定することを目的とする。

2017年度は、ウズベキスタン南部のファヤズテパ仏教遺跡から出土した壁画を調査した。とくにポスト・クシャーン朝に製作された可能性のある男性供養者を表す壁画（修復中）の写真撮影、描起図の作成をおこなった。

◆呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究

代表者・山本 崇 基盤研究 (C) 新規

本申請研究は、呪符木簡を素材とした本格的な研究を試み、呪符に込められた祈りや願いなど人びとの心性の時代的地域的特質を検討することにより、「木に文字を記す文化」の日本的特質をあきらかにしようとするものである。初年度にあたる2017年度には、既刊報告書等に掲載された呪符木簡の網羅的収集をおこなうとともに、本務の調査研究等と連携しつつ効率的に調査可能な地域を対象とし、愛知県、静岡県、兵庫県等から出土した呪符木簡ほかの出土文字資料を熟覧調査・撮影し、画像の収集にあたった。

◆春秋戦国時代の馬匹生産体制形成過程に関する実証的研究

代表者・菊地 大樹 基盤研究 (C) 転入

本研究は、中国養馬史のなかでも目覚ましい発展をみせた春秋戦国時代の馬匹生産体制に焦点をあて、その形成過程をあきらかにすることを目的とする。初年度は、基礎的データの集積を目的に、秦國関連遺跡出土馬骨の形態学的データの収集、馬匹生産に関する古典籍、簡牘や封泥といった出土文字資料の整理を進めた。その成果の一部は、動物、植物と人—生物考古学術研究会、日本ウマ科学会や日本中国考古学会にて発表した。

◆3D石器形態研究の確立による日本列島後期旧石器時代の生活・技術・文化の解明 代表者・野口 淳 基盤研究 (C) 新規

本研究は3D計測データにより後期旧石器時代の石器製作技術と人間の行動を復元する方法論を確立することを目的とする。3ヵ年の初年度である2017年度は、秋田県、東京都、千葉県および長野県の資料計測、仙台市地底の森ミュージアムに会場を借りての実験製作と計測ワークショップを実施したほか、考古学のための形態測定学に関する研究会を開催した。

◆木造三重塔における組上げ構法の再構築 代表者・西山 和宏 基盤研究 (C) 新規

本研究は、古代以来の積重ね構法に加えて、室町時代に長柱構法が出現、江戸時代初めには積重ね構法と長柱構法の併用式がみられるが、江戸時代中期以降は櫓構法が主流を占めるとされる木造三重塔における組上げ構法について、側柱や四天柱、左義長柱の立ち方、四天柱の有無、組物の納まり等に着目し、従来の組上げ構法について再構築をはかることを目的とする。

初年度にあたる2017年度は、先進性が指摘されている瀬戸内地方について資料を収集し、それぞれの要素における変容の過程や要因等について分析をおこなった。

◆先端技術による未発見遺跡の探査・研究および保護手法の開発

代表者・金田 明大 挑戦的研究 (開拓) 新規

把握が十分でないあるいは未知の遺跡の分布について、LiDAR計測や物理探査の手法を用いて把握を試み、技術の可能性と限界、研究および保護に資する技術の確立を目的としている。初年度にあたる2017年は、手持ちLiDARによる森林内計測、多チャンネル地中レーダーによる遺構の把握をおこない、また空中LiDARデータの解析手法についての検討をおこなった。また、三輪山周辺の祭祀遺跡出土資料の計測等をおこなった。次年度以降本格的にデータの解析とそれを反映した現地調査をおこない、各手法の有効性を検討したい。

◆「考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴地図の開発」

代表者・村田 泰輔 挑戦的萌芽研究 継続

最終年度となる2017年度は、2016年度まで進めてきた発掘調査によりあきらかとなった表層地質情報や災害痕跡情報、それを用いた表層地質断面図と古地形図の作成を進めた。発掘調査による災害発生時期の特定は、史資料との対比の上では必ずしも

高精度な時間解像度を得るにいたらない課題も出てきたが、層相変化にもとづく古地形図との対応関係としては問題ない範囲で取まった。同時にデータの検索や表示、入出力について視聴覚、展示技術の側面からその効果性の検証を加え、今後の研究に向けた課題を得ることができた。

◆日本と中国における古建築用語の相互訳および英訳を通じた比較研究手法の創生

代表者・鈴木 智大 挑戦的萌芽研究 継続

本研究は、日本と中国における伝統的な木造建築に関する歴史的な用語の比較を通して、東アジアにおける建築文化の特質を見出す研究手法の創生を目指す。

両国の古建築用語の相互訳をおこなうことで、共通点および各国の特質を見出し、さらに英語訳をおこなうことで、用語持つ意味を客観的に評価する。さらに、翻訳を通じた問題意識の形成・蓄積を通じて、論点を抽出する。

2年度目となる2017年度は、初年度の情報の収集・整理をふまえ、木造建築の構造部材において重要な役割を果たす「貫」について、日本と中国の用語を整理し、その一部を「日本と中国における繋貫の出現と変容」(『建築の歴史・様式・社会』中央公論美術出版、2018年1月)において発表した。

◆日本古代の乳製品加工に関する考古化学的証拠の探求

代表者・庄田 慎矢 挑戦的研究 (萌芽) 新規

本研究では、遺跡出土土器を対象に、土器残存脂質分析や残存タンパク質分析等、世界最先端の考古生化学的方法を用いることにより、日本古代における乳製品生産の直接的証拠を見つけ出すことで、新しい研究の地平を切り開くことを目指す。初年度は実験設備の導入および予備的な測定をおこなったほか、2018年2月10日に研究集会「ヨーロッパの考古学と日本の動物考古学の出会」を奈良文化財研究所にて開催し、最新の研究手法に関する情報交換、研究の方法論や今後の研究戦略についての議論等をおこなった。

◆古代東アジアにおける建築技術の重層性と日本建築の特質

代表者・海野 聡 若手研究 (A) 継続

東アジアにおける古代建築の関連性をあきらかにし、日本建築の特質を検討する研究の最終年度にあたる。

奈良時代の発掘遺構を中心に、全国の寺院や官衙の遺跡を収集し、その上部構造を

含めて検討した。

また現存建築については、中国山西省を中心とする古建築を取り上げ、日本の倉庫建築にみられる妻梁や組物に着目し、日本と中国の建築の比較をおこなった。

◆日本考古学国際化のための考古学関係用語シソーラス構築と自動英語化の研究

代表者・高田 祐一 若手研究 (A) 継続

本研究は、考古学関係用語シソーラスおよび考古学関係用語の日英対訳データベースを構築し、全国の発掘報告書の全文データを格納している「全国遺跡報告総覧」システムを拡張開発することで日本考古学の国際化に資することを目的とする。

2017年度は、全国遺跡報告総覧に登録されている約18,000件の報告書(テキストデータ15億文字)に対し、考古学関係用語の出現回数を集計し、図化した。他にも統計的自然言語処理技術を応用した機能を公開した。

◆対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究

代表者・丹羽 崇史 若手研究 (A) 継続

本研究は異なった条件で実験鑄造した試料どうしを比較検討する「対照実験」の手法を主軸として、殷周青銅器を中心とした古代東アジアの鑄造技術の解明に取り組むものである。2017年度は2年目にあたる。

本年度は、泉屋博物館等の国内機関のほか、中華人民共和国、大韓民国、台湾に出張し、資料調査等を進めた。研究協力者とは随時協議を進め、芦屋釜の里にて鑄造実験を実施したほか、富山大学にて前年度の実験製作品の自然科学分析もおこなった。また前年度に引き続き、出土青銅器・鑄型等、関連資料の集成を進めた。なお研究成果の一部を『泉屋博物館紀要』33号に掲載したほか、アジア鑄造技術史学会台北大会(2017年8月25・26日 台北)、BUMA IX(2017年10月17・18日 釜山)にて報告した。

◆中近世日本と東アジアにおける木造建築の変革に関する比較研究

代表者・鈴木 智大 若手研究 (A) 継続

本研究は、東アジア木造建築史の構築に向けた研究構想の一環として、東アジア各国の木造建築を、社会的・技術的・自然環境的な側面から比較研究するものである。

2年度目となる2017年度は、日本と中国における繋貫の発生と展開を通史的な解明を試みた。

その一部は、関西建築史研究会(2017年9月30日)において、口頭発表をおこ

ない、さらに「日本と中国における繫貫の出現と変容」と題し、『建築の歴史・様式・社会』（中央公論美術出版、2018年1月）において発表した。さらに、この検討をさらに探求するため、中国・浙江省において調査をおこなった。

また、国際研究会として、第2回東アジア木造建築史研究会を主催し、日本・中国・韓国における最新の研究成果の共有をはかった。

◆土器残存脂質分析を用いた縄文—弥生移行期における土器利用と食性変化の追跡

代表者・庄田 慎矢 若手研究 (A) 新規

本研究は、土器残存脂質分析の方法を主に用いて、縄文時代から弥生時代にかけて、日本列島の各地でどのような食性・調理内容の変化があったのかを実証的に追跡しようとするものである。初年度となる2017年度は、実験設備の導入およびサンプリング、予備的な測定等をおこなった。また、2018年1月27・28日には新学術領域研究「総合稲作文明学」と共同で、国際シンポジウム「アフロ・ユーラシアの考古植物学」を奈良文化財研究所にて開催し、考古植物学の分野における最先端の研究成果や方法論に関する情報交換をおこなった。

◆古代日本の宮都、寺院出土磚の基礎的研究

代表者・中川 二美 若手研究 (B) 継続

本研究は磚の生産から古代社会の手工業生産体制の一端をあきらかにすること、特に生産地と消費地の関係性をあきらかにすることが目的である。

2017年度は昨年度に引き続き、消費地である寺院の使用意図が反映される施釉磚の検討を整理し論文にまとめた。同時に、古代日本の宮都や寺院における施釉されない磚についても今まで集めた資料をもとに整理をおこない比較検討をおこなった。

◆重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題

代表者・恵谷 浩子 若手研究 (B) 継続

2017年度は長崎県平戸市や五島市、新上五島町等での現地調査を実施するとともに、平成29年度日本造園学会全国大会にてミニフォーラム「文化的景観研究2—様々な分野における自然基盤と風景の関係」を企画し、公開での議論をおこなった。

◆近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究—重森編年への検証として

代表者・高橋 知奈津 若手研究 (B) 継続

本研究は、安土桃山時代から江戸時代の寺院や邸宅の庭園を対象に、その構成要素や様式的特徴について詳細に整理・分析することにより、先行の様式編年研究を検証することを目的とする。

2017年度は、近畿各府県の対象事例の整理・分析を進めた。

◆古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造にかんする考古学的研究

代表者・諫早 直人 若手研究 (B) 継続

本研究は5・6世紀を中心に東北アジア各地の金工品について調査をおこない、各地の生産体制を復元するとともに、それらを相互に比較することで古代東アジア世界における金工品の生産と流通の実態をあきらかにすることを目的とする。

2017年度は最終年度にあたり、これまでに調査した成果をまとめ、金工品の高倍率写真を多数収録した成果報告書を刊行した。また遼寧省文物考古研究所との共同研究論集に三燕と倭の金工品についての論文が掲載された。初年度から飛鳥寺塔心礎埋納品を資料化しており、今年度は金・銀製品について報告をおこなった。

◆七世紀土器編年からみた古代宮都の変遷に関する考古学的研究

代表者・若杉 智宏 若手研究 (B) 継続

本研究は、飛鳥地域出土の土器と難波地域出土の土器の比較から、7世紀半ば以降の宮都の変遷過程を再検討することを目的とする。

研究計画の最終年度にあたる2017年度は、昨年度に引き続き坂田寺池SG100出土土器の再整理作業を進めた。また、土器群の位置づけについて検討するため、難波宮跡出土土器群等の実見調査をおこなった。

それらの成果をもとにしたSG100出土土器群についての報告を『奈文紀要2018』に公表した。

◆九州旧石器編年の再構築と集団関係の研究—中九州石器群の再検討

代表者・芝 康次郎 若手研究 (B) 継続

九州の旧石器時代編年は、その南北で異なる。この違いを、両地域の中間にある中九州の石器群を詳細に検討し、他地域と比較することで埋めようとするのが、本研究で主眼である。2017年度は研究最終年度にあたる。春期には熊本県西原村河原第6遺跡において第3次発掘調査をおこない、細石刃石器群ブロックの内容把握に努めた

ほか、AT火山灰層下位の土壌堆積についても調査を実施した。この河原第6遺跡における一連の調査成果およびそれに派生する編年の問題や集団関係に関する問題を、『河原第6遺跡の研究』としてまとめた。

◆古代都城造営における造瓦体制の復元的研究

代表者・石田 由紀子 若手研究 (B) 継続

本研究は、古代都城造営における物資の生産・供給に関するシステムの一端を、瓦を通して解明するものである。2017年度は研究最終年度であり、これまでおこなってきた製作技法からの検討や宮の造瓦造瓦体制についてまとめるとともに、窯構造についても検討した。藤原宮において瓦の大量生産が可能になったことは、窯構造の変化とも大きな関わりがあり、藤原宮において導入された窯構造は平城宮の瓦窯である中山瓦窯にも継承されることを指摘した。この成果は、「藤原宮造営に伴う瓦生産体制と瓦窯構造の変化」（『関西地方の瓦窯の構造3』窯跡研究会）で公表した。

◆荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究

代表者・大林 潤 若手研究 (B) 継続

本研究は社寺建築を中心とした宗教建築における荘厳化を目的とした装飾について、各建築における荘厳化の内容を解明することを目的とする。2017年度は、前年度に引き続き、奈良県下の建築について、修理工事報告書から装飾要素について確認できる事例を収集し、図面・写真をまとめたデータベースの作成をおこなった。また、装飾に関する文献・論文等の収集をおこなった。

◆水蒸気移動を用いた出土鉄製文化財の新規脱塩法の開発

代表者・柳田 明進 若手研究 (B) 継続

本研究は保管時に腐食が生じる鉄製遺物に対して安定化処置として実施されている脱塩において、水蒸気移動を利用した従来法に比べて効果が高く、鉄製遺物へのストレスが大幅に軽減される新規法の開発を目的としている。3年目となる2017年度は従来法と新規法の処置中の腐食量の比較、および処理条件の最適化のための室内実験を実施した。その結果、新規法では従来法に比べて処置中の腐食が顕著に緩慢であるとともに、従来法と同等の処置後の腐食抑制の効果を示した。さらに、これらの成果については、日本文化財科学会第34回大会において口頭発表をおこなった。

◆財政関係木簡による古代地方社会の実態解明

代表者・山本 祥隆 若手研究 (B) 継続

本研究は、地方官衙遺跡で多く出土する財政関係木簡等の総合的な検討により、古代国家の支配システムとその運用の具体像を構築するとともに、古代地方社会の実態に迫ることを目的とする。

2年目となる2017年度は、全国各地の木簡出土事例を収集しつつ、鳥根県・青木遺跡、福岡県・大宰府跡、宮城県・多賀城跡等から出土した木簡の熟覧調査、および各遺跡の現地踏査をおこなった。また、それら調査の成果を平城宮・京跡出土木簡の検討にも応用し、いくつかの学会報告や論文発表をおこなった。

◆古代都城における木器生産に関する基礎的研究

代表者・浦 蓉子 若手 (B) 継続

2年目となる2017年度は、木工に関わる工房の存在が推測されている奈良時代前半の土坑資料について、同一層位の木製品、切削時の加工屑、自然木等の樹種同定を網羅的にこなった。木製品、切削時の加工屑と自然木では大きく傾向が分かれた。加工屑にみられる樹種は自然木の樹種には現れず、木材として搬入・加工されたと推測できる。また、比較資料として宮内の廃棄土坑の木屑、自然木についても樹種同定をおこなった。

さらに平城宮・京の木工の一端として加工の残る竹について集成をおこない、実測図の作成、写真撮影等の資料化をおこなった。あわせて種同定をおこないその多くがハチクママダケであることを確認し、竹製品の加工について検討を加えた。また、曲物作製に欠かせない樺皮資料についても平城宮・京内の資料集成をおこない、平城宮・京での樹皮紐製作工程の認定をおこなった。

◆二階建ての御殿にみる近世武家住宅の実体と空間の構成

代表者・大橋 正浩 若手研究 (B) 継続

本研究は、江戸時代に建てられた武家住宅のうち、私的に用いられたとされる2階建ての御殿に注目し、建物の実体と利用の実態から、建築的な空間構成をあきらかにすることを目的とする。

2017年度は、類例調査の一環として、東京国立博物館所蔵の江戸城本丸御殿の屋敷絵図、および筒井稔氏所蔵東高木家文書内の東高木家陣屋御殿に関する屋敷絵図を中心に熟覧調査を進め、翻刻とトレースによる資料整理をおこなった。

調査成果は、日本建築学会の大会、支部研究集会等で発表予定である。

◆北陸地方の温泉地における共同浴場の建築史的研究

代表者・福岡 啓人 若手研究 (B) 継続

本研究は、江戸時代の加賀藩領である石川県と富山県を対象として、温泉地の共同浴場に関する建築構造や意匠等の歴史の変遷をあきらかにすることを目的とし、共同浴場から建築の一端を把握することを目指している。2017年度は前年度に引き続き、調査対象地の共同浴場について、資料をもとにCADによる図面作成をおこなった。加えて、1930年時点の全国の温泉地を対象として、共同浴場の名称および棟数や利用形態等について、データベース作成を進めた。なお期間延長申請をおこない、次年度も継続して研究をおこなう予定である。

◆大工道具にみる東アジア木造建築技術史の基盤構築

代表者・李 暉 若手研究 (B) 継続

本研究は、中国と日本の伝統的大工道具の調査を通して、古代建築造営の技術を追求するものである。2年目となる2017年度は、日本建築学会大会(中国)において、古建築造営に関する用材規格について研究成果を発表した。また、論文集『建築の歴史・様式・社会』(中央公論美術出版、2018年)において、大鋸を用いる製材工程について論考を公表した。研究成果の公表と並行して、中国の浙江省台州地区における現地調査について、一次調査をおこない、次年度における詳細調査の内容を確定できた。

◆地理情報システムを用いた古代日本人における移動コスト算出の基礎的研究

代表者・清野 陽一 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、地理情報システム(GIS)を用いた古代日本における人間の移動時間(およびそれで表現される移動コスト)の最適な計算条件(パラメータ)を、各種歴史的史資料を分析することで解明することである。多くのGISで用いられる移動コスト計算のパラメータは海外の近現代のデータにもとづくことが多いため、実際の古代日本に関する史資料を分析し、当時の妥当な移動コストが算出できるようにすることが目的である。

2年目となる2017年はこれまでの研究を振り返り、その成果を当研究所の第120回公開講演会において発表した。また、昨年に引き続き、基礎的な資料収集と整理をおこなって、現地調査に備えるとともに、

調査に必要となる機器の選定・入手とその特性に対する検討をおこなった。

◆出土木製遺物の水中保管時における劣化を効果的に抑制する手法の開発

代表者・松田 和貴 若手研究 (B) 新規

本研究では、出土木製遺物の水中保管環境における劣化を効果的に抑制するための、人的・経済的な負担や環境負荷が小さく、簡便かつ継続的に運用可能な手法の開発を目的としている。

2017年度は出土木材を試料として、溶存酸素量および温度条件の違いが、水中における木材の劣化におよぼす影響を定量的に検討するための腐朽実験に着手した。試料は継続的に分析をおこなっており、種々の環境条件と試料の劣化程度との相関を中長期的に検討する予定である。なお、実験期間をより短くするための手法についても新たに検討をおこなっている。

◆彩色文化財のTHz Imaging及びμ FocusX線CTを用いた非破壊界面調査

代表者・金 旻貞 若手研究 (B) 新規

本研究の目的は、テラヘルツ波イメージング手法による彩色文化財の内部構造調査から、彩色文化財の劣化情報を正確に把握することである。

2017年度は、彩色文化財の構造を最表面の彩色層のみならず、その下層の下地層、紙や木材等の支持体にいたるまで、非破壊非接触で絵画資料の構造体を総合的に把握するとともに、得られた情報を正しく解釈するために測定条件の設定および材料上、装置の特性について検討した。あわせて、修理前と修理後の比較調査から今まで目に見えなかった彩色構造を可視化した。これまでの研究成果の一部は、学会等で公開した。

◆地震痕跡を残す災害遺構の保存と公開活用に関する研究

代表者・小沼 美結 若手研究 (B) 新規

本研究は、国内外で発生した大規模な自然災害の跡地(災害遺構)とその関連施設について、保存にいたった経緯と現状を網羅的に調査し、得られた知見を今後の災害遺構の保存と活用に活かすことを目的とする。

3ヵ年計画の初年度にあたる2017年度は、主に日本国内に保存されている災害遺構の記録や災害の跡地の活用方法等について、文献等の調査、収集をおこなった。

◆古墳時代中期王権中枢部における埴輪生産体制の実証的研究—奈良市佐紀古墳群を中心に

代表者・大澤 正吾 若手研究 (B) 新規

本研究は、ウナベ古墳出土埴輪を中心に佐紀古墳群出土埴輪の整理・研究を通じて、古墳時代中期の王陵級古墳における埴輪群組成の実態をあきらかにすることを目的とし、畿内中枢部における埴輪生産体制の時系列的な変化とその背後にある王権による労働力編成の在り方を実証的に論じることを目指す。初年度となる2017年度は、奈良文化財研究所が所蔵する佐紀古墳群関連資料の所在確認と、整理対象古墳となるウナベ古墳、平塚1号墳、平塚2号墳の埴輪の出土状況の検討、およびウナベ古墳出土埴輪の一部について、注記と接合検討、実測をおこなった。

◆渤海遺跡出土建築部材の基礎的研究—三次元計測データの活用

代表者・中村 亜希子 若手研究 (B) 新規

本研究は、東京大学考古学研究室をはじめとする機関が所蔵する渤海国遺跡出土遺物の3次元計測を通し、渤海国における陶製建築部材の生産・流通の体系をあきらかにすることを目的とする。また、3次元計測の一手法であるSfM-MVS (Structure from Motion and Multi-View Stereo) の文化財分野での普及自体も目的のひとつとする。

2017年度は東京大学考古学研究室および駒場博物館が収蔵する紋様磚33点の計測をおこない、計測手法と笱の復元研究の経過について、12月におこなわれた日本中国考古学会大会にて発表した。

◆奈良時代に用いられた色材・素材のナノ構造解明

代表者・杉岡 奈穂子 若手研究 (B) 新規

本研究は、染色・絵画等に用いられる彩色材料に加え、文化財全体を構成する金属、木材、繊維、あるいは、漆・膠等の固着剤を含めた様々な物質で作られている「材料」の微細構造観察をおこなっている。これまでに、薬師寺東塔初層の天井裏板および支輪裏板に用いられた彩色材料について調査をおこなってきたが、緑色彩色からはCuが検出され、塩基性炭酸銅の使用が考えられる。その他に、緑色彩色には塩化銅等の材料の使用が考えられる箇所もあり、使い分けて用いられていることがあきらかになりつつある。今後、微細構造観察からこれまで詳細が不明であった材料および技法を構造的にあきらかにしていく計画である。

◆森蘊の業績と日本庭園史の作成—歴史的庭園のデータベース作成

代表者・エマニュエル・マレス 若手研究 (B) 新規

本研究の目的は、日本庭園史家であり、また作庭家でもあった森蘊 (もり・おさむ、1905-1988) の業績を再評価すると同時に、昭和期の日本庭園史学の構築を再考することである。奈良文化財研究所に保管されている多くの資料 (図面・スケッチ・写真・原稿・書簡等) の整理を進めながら、森と一緒に働いた職人の聞き取り調査を通して考察を深める。

初年度にあたる2017年度は、森と一緒に働いた庭師、古川三盛氏と牧岡一生氏のインタビューを実施し、記録映像も撮った。また、奈良県・京都府・大阪府・福岡県久留米市等に残る森の作庭事例の現地調査をおこなった。さらに「復元学」の提唱—考証から復元へ—という研究会において「森蘊による歴史的な庭園の復元的研究」を発表した。

◆「カザフスタンにおける後期旧石器文化形成プロセスの研究」

代表者・国武 貞克 新学術領域研究 新規

カザフスタン南部において旧石器時代遺跡の分布調査と試掘調査をおこなった。その結果、カラタウ山地南半部の東麓において21ヵ所の旧石器時代遺跡を、天山山脈北麓において5ヵ所の旧石器時代遺跡を新たに発見した。このうち後期旧石器時代遺跡は12遺跡確認し、クズルアウト3〜5遺跡では石刃および石刃石核がまとまって採集された。またピリョック・バスタウ・ブラック1遺跡では、試掘調査により有機質遺物をふくむ後期旧石器時代の遺物包含層が層位的に良好に堆積していることが確かめられた。カザフスタン全体で層位的な堆積のある後期旧石器遺跡は4例のみであり、稀少な事例である。次年度以降は、これらの遺跡を発掘調査することにより、これまで空白地帯であった中央アジア中央部において、現代人の拡散過程を考古学的に直接議論し得る新たなデータを獲得することが可能となると期待される。なおこの調査にともないカザフスタン共和国国立博物館と奈良文化財研究所において研究交流協定を締結した。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2017年7月7〜8日、第8回 (通算29回)「文化財フィールド写真術」をテーマ

として、文化財写真技術研究会の総会と研究集会を、平城宮跡資料館講堂において開催した。

1日目は総会と講演を実施した。文化庁記念物課の近江俊秀文化財調査官を招いて「文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について」と題する講演に続いて、文化庁報告策定の作業部会メンバーに加わった会員も交えて「デジタルカメラ導入に関する指針」に関する意見交換の場を設け、埋文行政のデジタルシフトを中心に討論がおこなわれた。

2日目午前は、中村一郎の進行により「メーカーに聞く〜より身近になった中判デジタルカメラ〜」と題した最新カメラ情勢と特徴を紹介する機会を設けた。午後は特集「文化財フィールド写真術」として、特集担当の栗山による趣旨説明に続いて以下6本の発表がおこなわれた。

「埋蔵文化財の撮影術」(栗山雅夫:奈良文化財研究所)、「建造物・文化的景観の撮影術」(杉本和樹氏;西大寺フォト)、「民俗文化財の撮影術」(杉浦秀昭氏;名古屋博物館)、「古文書の撮影術」(高山さやか氏;東京大学史料編纂所)、「資料としての彫刻写真の撮り方」(佐々木香輔氏;奈良国立博物館)、「工芸品の撮影術」(北田仁司;宮内庁正倉院事務所)である。

内容は、各文化財分野の第一線で活動している方々による実体験にもとづいた写真技術論の紹介であり、多様な文化財行政にシフトしている現状をふまえて種別毎の撮影基礎と視点を整理した。

なお、特集内容も含んだ会誌『文化財写真研究』VOL. 8も刊行している。

(栗山 雅夫)

◆庭園の歴史に関する研究会

2017年10月29日に、平城宮跡資料館小講堂において庭園の歴史に関する研究会を開催した。2016年度から5ヵ年は近世庭園を研究対象としており、2年目の2017年度は「回遊式庭園と庭園文化」をテーマとした。冒頭で回遊式庭園に関する研究現況と論点を提示した後、ニコラ・フィエヴェ氏「桂別業の風景」、町田香氏「宮廷文化サロンの活動と舞台」、丸山宏氏「名古屋城二之丸庭園の復元整備にむけて—絵図と発掘からの検証—」、御厨義道氏「大名庭園の具体相—栗林荘を事例として—」、野田麻美氏「江戸時代〈庭園画〉史 概論—大名庭園を描いた作品を中心に—」の研究報告を得た。総合討議では、回遊式庭園の様式成立やその後の展開について議論をおこなった。(高橋 知奈津)

◆木簡学会研究集会

2017年12月2～3日、第39回木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した（参加者143名）。

2日は、鈴木景二氏（富山大学）「中近世の輸送と呪符」、山本崇「山田道の発掘調査と出土木簡」の2本、3日は、山本祥隆「2017年全国出土の木簡」、永野智子氏（奈良市埋蔵文化財調査センター）「平城京左京二条四坊十坪の発掘調査と出土文字資料」、鈴木一議氏（奈良県立橿原考古学研究所）・鶴見泰寿氏「名勝奈良公園・興福寺跡（子院観音院跡）の発掘調査と出土木簡」の3本の報告があった。また、各調査機関のご協力を得て木簡・墨書土器の実物展示をおこない、観察を踏まえた議論の深化に資することができた。

なお、会誌『木簡研究』第39号を編集・刊行した（編集担当：馬場基）。

（渡辺 見宏）

◆東アジア木造建築史研究会

2018年2月25日、平城宮跡資料館小講堂において、第2回東アジア木造建築史研究会を開催した（参加者27名）。東アジア木造建築史の構築を目的とした国際研究会である。プログラムは以下の通りである。

司会：鈴木智大

通訳（日中）：李暉・唐聡（東京大学）、（日韓）：金碩顯（韓国A & A文化研究所）

Session1 韓国、発表：白昭薫（韓国・明知大学）「『营造法式』と修徳寺大雄宝殿及び浮石寺無量寿殿の設計原理」、講評：韓志晩（韓国・明知大学）

Session2 中国、発表：周淼（中国・浙江大学）「五代・宋・金代の晋中地域における木造建築研究の概説および晋祠聖母殿の肘木・通肘木・梁の木取方法の研究」、講評：丁焄（中国・天津大学）

Session3 日本、発表：野村俊一（東北大学）「中世仏堂の移柱・減柱と東アジア一貫・梁・台輪をめぐって」、講評：鈴木智大

昨年につづき、各国の建築史研究に対する相互理解を得ることができ、研究の手法や考察の視点等の詳細な検証、そして東アジアの比較研究の可能性の探求等、様々な観点から活発な議論を展開することができた。

なお、本研究会はJSPS科研費16H06113（研究代表者：鈴木智大、研究協力者：韓志晩、丁焄、李暉）の成果の一部である。

（鈴木 智大）

◆条里制・古代都市研究会

2018年3月3～4日に平城宮跡資料館講堂において第34回条里制・古代都市研

究会大会を開催した。3日は「都市の荘厳～幢幡を立てる儀礼をめぐって～」を大会テーマとして、志村佳名子氏「宮廷儀礼と幢幡一宝幢遺構の意義をめぐって」、大澤正吾「宮殿における幢幡遺構・幢旗遺構・旗竿遺構の展開」、海野聡「古代寺院の幢幡」の3本の研究報告と活発な質疑応答が交わされた。

4日は調査レポートとして芝康次郎・丹羽崇史・庄田慎矢・浦蓉子「平城京朱雀大路とその周辺の調査成果」、福山博章氏「京都府木津川市岡田国遺跡の発掘調査」、樋口薫氏「発掘調査成果からみた由義寺・由義宮」、丸山利枝氏「長者屋敷官衙遺跡の幢幡遺構」、石橋美和子氏「鹿島神宮境内附郡家跡の景観一近年の調査成果から一」の各報告があり、質疑応答がおこなわれた。参加者は94名であった。

（小田 裕樹）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

昨年度に引き続き、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門の見地からの助言をおこなった。

特別史跡平城宮跡南辺の二条大路および史跡朱雀大路地区では、国土交通省による平城宮跡展示館（平城宮いざない館）の整備工事、第一次大極殿院の復原整備工事にとまなう工事現場事務所建設や南門の施工にとまなう基礎や仮設物の建設、平城宮跡内のサイン更新等に対して、立会調査で対応し、遺構の保護を確認した。さらに、平城宮いざない館内部の展示等の作業に対して、パネル作成や出土遺物の貸し出し等を含めて全面的に協力した。

いっぽう、文化庁がおこなった平城宮跡内における夜間フットライトの設置、大膳職推定地の木簡出土地における案内板設置、その他サインの更新に対して、やはり立会調査で対応した。

2010年度から進めている第一次大極殿院の復原研究は、昨年度に引き続き南門の飾金具を中心とする検討を進め、所内検討会を2回、有識者会議を3回開催した。製作技法と意匠との関連を中心とした検討をおこない、隅木、尾垂木、地垂木、飛檐垂木の各木口金具について、意匠面での復元案がほぼ固まった。その成果の一部については、『奈文研紀要2017』を参照されたい。

いっぽう、12月からは第一次大極殿院南門の復原整備工事が始まり、定期的開催される工事関係者会議に出席するとともに、

現場からの各種依頼に対応した。1月から3月には、工事関係者に対して平城宮跡の研究や整備、南門の復原等についての講義をおこなった。（箱崎 和久）



第一次大極殿院の復原検討に関わる出土金具観察会（2017年5月19日開催）

●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究

高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニング等の作業がほぼ終了し、最終的な漆喰の安定化がはかられる段階になっている。壁画の現状を把握するとともに材料に関する知見を得るために、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこなっている。2017年度は石材、漆喰および彩色に関する調査研究を以下の通りおこなった。

高松塚古墳石室の床石の安定化と展示を実現させるためのフレームの検討および設計をおこなった。また、有機ケイ酸エステルによる含浸強化処置の効果を検証するため、同薬剤により含浸強化処理した凝灰岩の引張強度試験を実施した。

漆喰の安定化をはかるにあたり、漆喰層の内部の状況および石材からの剥離の有無を知る必要がある。本年度より、修理技術者の触診とTHz波イメージング調査を併用し、漆喰の「損傷地図」を作成することに取りかかった。本年度の作業は西壁1について実施した。なお、漆喰のTHz波イメージングによる計測は、天井石4石について実施した。

高松塚古墳壁画の彩色の色料調査として実施した蛍光X線分析の成果を広く公開するため、得られたデータの整理をおこない、報告書として刊行するための準備を進めた。色料については、さらに精査を進めるための分析法としてX線回折分析の適用が強く求められており、壁画を安全に非破壊非接触で分析するためのX線回折装置の開発研究を進めた。

壁画の現状を記録するため、床石と南壁を除く全11石に対して、経年変化の記録撮影をおこなうとともに、可視光と赤外線によるデジタルスキニングを実施した。また、色料に関する面的な情報を得るた

め、東壁2、東壁3、西壁2に対しては紫外線を用いたスキヤニングも実施した。

その他、石室解体事業に際して実施された発掘調査の成果をまとめ、正式な報告書として『特別史跡高松塚古墳発掘調査報告書』を刊行、天井石3と4の間の東側面の石室目地漆喰の台座の作製、および5月、7月、9月、30年1月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開の解説員としての研究員の派遣をおこなった。(高妻 洋成)



高松塚古墳壁画漆喰のTHz波イメージング調査

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係では、以下の事業を実施した。

遺物に関する事業では、円板状鉄製品についてアクリル樹脂による強化処置を実施した。琥珀玉については、内部の微細な亀裂を把握するため、マイクロフォーカスX線CT撮影を実施した。また、石室内堆積土サンプルと石室内出土の漆喰片を、展示可能な状態かどうかを確認した。出土した遺物は点検作業をおこなうとともに、温度湿度のモニタリング、調湿剤等の交換作業を実施し、主要なものについて3次元計測を実施した。

発掘調査成果の整理・活用にかかる事業としては、石室および仮設保護覆屋の3次元計測データをもとに、覆屋存在時の墳丘周辺と、整備後の墳丘周辺のマデリング作業を実施した。

科学分析および壁画の記録撮影事業では、テラヘルツによる壁画の下地漆喰の状態調査を実施した。また、東西南北および天井の壁面各面と、画像細部について、高精細カメラによる経年変化の記録撮影を実施した。

国営飛鳥歴史公園の文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設では、研究員が常駐して施設の日常管理および運営をおこなうとともに、壁画や出土遺物を展示公開した。壁画非公開期間は、展示室にて出土遺物等を公開し、パネル作成等の展示業務全般をおこなった。また、キトラ古墳の整備に関するリーフレットを作成した。

古墳の活用にかかる事業としては、韓国の十二支像と中国における唐代壁画の保存

活用状況を視察した。また、古墳現地に設置した乾拓板を活用して、壁画に関する講演会と乾拓体験教室をおこなった。

(玉田 芳英)

現地説明会・見学会

◆平成29年5月21日(日)

平城第584次調査(平城宮跡東院地区)
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部(平城地区)
研究員 山藤 正敏
参加者519人 調査面積1,102㎡

◆平成29年10月7日(土)

東大寺東塔院跡
発掘調査現地説明会
(東大寺・奈良県立橿原考古学研究所と共催)
都城発掘調査部(平城地区)
研究員 芝 康次郎
参加者801人 調査面積628.5㎡

◆平成29年12月23日(土)

平城第593次調査(平城宮跡東院地区)
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部(平城地区)
研究員 小田 裕樹
参加者823人 調査面積969㎡

◆平成30年3月3日(土)

飛鳥藤原第195次(大極殿院回廊東北隅)
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)
研究員 前川 歩
参加者645人 調査面積594㎡



平城第593次調査 現地説明会

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2017年度は、専門研修14課程を開催した。(2017年度文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、現地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数82日、研修生総数178名であった。

各部・センターでは、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2017年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の遺跡探査、動物遺存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（考古学）、高妻洋成（保存科学）、尾野善裕（考古学）、馬場基（史料学）、山崎健（環境考古学）の5名がそれぞれの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必

要に応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこなった。

2017年度には、修士課程5名、博士後期課程6名に加え、京都大学大学院総合生存学館（思修館）総合生存学専修博士一貫課程の4年次学生を研究生として受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員として、森本晋（文化財学の諸問題）、神野恵（歴史考古学特論）、渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生への研究指導をおこなった。

いずれも平城宮・京跡等の遺跡や、そこから出土した土器や木簡をはじめとする遺物、あるいは文化財関連データベース等、実地の調査研究に密着したもので、大学における通常の授業では経験できない、奈良文化財研究所ならではの特色ある教育を実践することができた。

なお、これとは別に、博士前期課程の大学院生のインターンシップの受け入れをおこなった。

奈良大学への教育協力

昨年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備について、最新事例を紹介しながら体系的に講義をおこない、平城宮跡において学外授業を実施した。

2017年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡	(滋賀) 敏満寺石仏谷墓跡 多賀神社奥書院庭園 慶雲館庭園 清水山城館跡 大津市伝統的建造物群	跡 益田氏城館遺跡群
(岩手) 鳥海柵跡	(京都) 宇治川太閤堤跡 恭仁宮跡 大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	(岡山) 高梁市伝統的建造物群 吉岡銅山関連遺跡 西高月遺跡群 高梁市旧吹屋小学校校舎
(宮城) 多賀城跡	(大阪) 百濟寺跡 鳥坂寺跡 百舌鳥古墳群 日根荘遺跡 飯盛城跡 二子塚古墳 難波宮跡 岸和田城庭園（八陣の庭） 旧西尾家住宅	(広島) 甲立古墳 備後国府跡
(秋田) 横手市伝統的建造物群	(兵庫) 赤穂城跡 古代官道 石の宝殿および竜山石採石遺跡	(山口) 周防鑄銭司跡 周防国分寺旧境内
(福島) 宮脇廃寺跡 八十里越	(奈良) 中宮寺跡 栗山古墳 鳥の山古墳 春日古墳 橿原市伝統的建造物群 五條市伝統的建造物群 宇陀市松山地区伝統的建造物群	(徳島) 勝瑞城館跡
(栃木) 佐貫石仏	(鳥取) 大高野官衙遺跡 斎尾廃寺跡 深田氏庭園	(香川) 快天山古墳 丸亀城跡
(群馬) 上野国佐位郡正倉跡 上野国新田郡家跡	(島根) 出雲国府跡 石見銀山遺跡 荒神谷遺跡	(愛媛) 永納山城跡
(千葉) 墨古沢南I遺跡		(福岡) 大宰府史跡 大宰府跡推定客館地区 須玖岡本遺跡
(神奈川) 橘樹官衙遺跡群		(佐賀) 肥前陶器窯跡 三重津海軍所跡
(石川) 金沢城 真脇遺跡		(長崎) 鷹島海底遺跡
(福井) 朝倉氏遺跡 兜山古墳 金ヶ崎城跡 柴田氏庭園 若狭町伝統的建造物群		(熊本) 棚底城
(長野) 塩尻市伝統的建造物群		(大分) ガランドヤ古墳 法鏡寺廃寺跡 長者屋敷官衙遺跡 元町石仏
(岐阜) 弥勒寺官衙遺跡群 岐阜城跡		(宮崎) 日向国府跡 蓮ヶ池横穴群
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡 片山廃寺跡		
(愛知) 大曲輪貝塚 島原藩主深溝松平家墓所 旧龍性院庭園		

2017年度 文化財担当者研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修 日数	応募 者数	受講 者数
専門 研 修	建築遺構 調査課程	6月12日 ～ 6月16日	8～ 15名	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構や出土建築部材に関して必要な上部構造の専門的知識や発掘方法などについての研修。	遺構研究室	5日	7名	7名
	建造物保存 活用基礎 課程	6月19日 ～ 6月23日	8～ 15名	〃	文化財建造物の保護行政をおこなうための文化財建造物に関する基礎、および文化財建造物の保存・活用に関する基礎の習得を目指す研修。	建造物 研究室	5日	21名	21名
	出土品管理 ・活用課程	7月10日 ～ 7月14日	8～ 15名	〃	発掘調査報告書公刊後に求められる、出土品の有効かつ効率的な管理から活用、展示に関する基礎的な研修。特に、美術工芸品とは一線を画す出土品の展示に主眼を置きたい。	展示企画室	5日	29名	22名
	災害痕跡 調査課程	7月24日 ～ 7月28日	8～ 15名	〃	地震、津波、火山などの災害痕跡を理解するための専門的知識と調査方法を取得することを目的とした研修。	環境考古学 研究室	5日	5名	5名
	遺跡情報記録 調査課程	9月12日 ～ 9月15日	8～ 15名	〃	遺跡・遺物の正確な記録とその保存活用手法として、GISやデータベースの利用、遺跡情報の公開に関する知識の取得を目指す研修。	文化財情報 研究室	4日	8名	8名
	文化的景観 整備活用 課程	9月20日 ～ 9月22日	8～ 15名	〃	文化的景観の保護に取り組んでいる担当者を対象とし、文化的景観の整備活用に必要な知識を習得することを目的とする研修。	景観研究室	3日	6名	6名
	三次元 計測課程	9月25日 ～ 9月29日	8～ 15名	〃	三次元計測の利用に関して必要な専門知識と技術の習得を目指した研修。	遺跡・調査技術 研究室	5日	14名	14名
	保存科学Ⅱ (有機質遺物) 課程	10月10日 ～ 10月18日	8～ 15名	〃	出土有機質遺物の一時保管方法から保存処理方法についての基礎的な研修。	保存修復科学 研究室	9日	6名	6名
	古代・中近世 瓦調査課程	11月13日 ～ 11月17日	8～ 15名	〃	古代・中近世遺跡出土瓦の調査研究に関して必要な専門知識と技術の研修。	考古第3 研究室	5日	10名	10名
	文化財 写真課程	11月27日 ～ 12月7日	8～ 15名	〃	文化財の記録の中核をなす記録写真撮影について、様々な文化財写真分野の基礎知識と、デジタル写真を中心とした実習による実技を習得できる研修。	写真室	11日	18名	18名
	報告書編集 基礎課程	12月7日 ～ 12月14日	8～ 15名	〃	文化財調査記録に必要な不可欠な報告書出版について、記述内容の意義や記述記録の基礎知識を習得するための研修。	企画調整室	8日	20名	20名
	報告書デジタル 作成課程	12月14日 ～ 12月21日	8～ 15名	〃	報告書出版に必要な編集やコンテンツ制作の技術について、デジタル編集を中心に据えた実習で、技術を習得することを目的とした研修。	企画調整室	8日	15名	15名
	名勝保存 活用基礎 課程	1月15日 ～ 1月19日	8～ 15名	〃	名勝の概念、調査、保存管理、修理、整備、庭園史等について、基本的な考え方から実務に至る基礎知識を習得することを目的とする研修。	遺跡整備 研究室	5日	11名	11名
保存科学Ⅲ (応急処置) 課程	2月13日 ～ 2月16日	8～ 15名	〃	脆弱遺物の取り上げ方法から、保存処理までの一時保管方法についての基礎的な研修。	保存修復科学 研究室	4日	15名	15名	

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「藤原京を掘る―藤原京一等地の調査―

2017年4月28日～7月2日

学報第94冊『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ―藤原京左京六条三坊の調査―』(2017)としてとりまとめられた、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)庁舎の建設に先立つ発掘調査の成果を紹介。会期中の入館者数9,613人。講演会「藤原京の役所を掘る」(講師:市大樹)を開催、参加64名。図録『藤原京を掘る―藤原京一等地の調査―』刊行。

◆夏期企画展「第8回飛鳥資料館写真コンテスト「飛鳥の路」

2017年7月28日～9月3日

「飛鳥の路」をテーマに募集した205点の作品を会場に展示。審査と来館者投票による上位者を表彰した。会期中の入館者数2,930人。ちらしを4種類作成し、入賞作品を配したフレームを会場で配布するなどPRをおこなった。同時に「ボク、ワタシが撮る写真―奈良県高校写真展―」を地下ロビーにて開催した。



◆秋期特別展「高松塚古墳を掘る―解明された築造方法―

2017年10月6日～12月3日

文化庁による高松塚古墳の石室解体から10年、『特別史跡高松塚古墳発掘調査報告』に結実した、石室解体事業にともなう発掘調査の成果を中心に紹介。会期中の入館者数9,877人。

講演会「高松塚古墳の構築技術を解明する」(講師:廣瀬覚)を開催、参加70名。図録『高松塚古墳を掘る―解明された築造方法―』刊行。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2017」

2018年1月26日～3月18日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会との共催。発掘調査が続く飛鳥藤原地域の、2015・2016年度の発掘調査成果を紹介。会期中の入館者数2,956人。図録『飛鳥の考古学2017』刊行。

平城宮跡資料館の展示

◆春期企画展「永野太造作品展―草創期の奈文研を支えた写真家―

2017年4月29日～5月31日

帝塚山大学との共催展。永野太蔵氏は、奈文研草創期の15年間にわたって調査に同行し、写真撮影をおこなった写真家。奈良文化財研究所登録写真第1号も氏が撮影したもの。その作品を当時の奈文研の研究成果や撮影機材等と展示した。会期中の入館者数22,738名。

◆夏期企画展「ナント! すてきな!? 平城生活♪」

2017年7月22日～9月3日

夏のこども展示。架空の人物である高級役人“とよなりさま”と下級役人“やかまるさん”の一日、一年、一生を出土品や模型等で示し、来館者に平城京の主な住民である役人たちの平城ライフを知ってもらうことを目的とした。この展示のために作成したリーフレット『ナント! すてきな!? 平城生活(ライフ)♪』は好評で、展覧会終了後、周辺小中学校での学習のテキストに用いられた。会期中の入館者数は10,882名。ギャラリートークを4回開催(参加119名)。

◆秋期特別展「地下の正倉院展―国宝 平城宮跡出土木簡―

2017年10月14日～11月26日

2017年に「平城宮跡出土木簡」として計3,184点の木簡が国宝に指定されたことを記念し、国宝となった木簡の実物を展示する特別展を開催。近年の遺構にフォーカスした展示とは異なり、時代・内容ともにバラエティに富んだ展示となったほか、これらの木簡が出土した発掘調査の写真も多数展示した。会期中の入館者数は14,841名。ギャラリートークを3回開催(参加181名)。

このほか、新春ミニ展示として「平城京の戌」(2018年1月4日～1月28日、入館者数5,220名)を開催した。



2017年度 入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は69頁	平城宮跡資料館（無料）	合計
33,696人	104,279人	137,975人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して、平城宮跡への理解を深めていただけるよう案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業については、1999年10月から実施しているが、2018年1月より新たな制度のもとで、活動を開始した。

2018年3月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は164名を数え、定点6カ所の解説を中心に事前予約による宮跡内ツアーガイドをおこなっている。



2017年度「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数 304日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数								解説をした平城宮跡 解説ボランティアの 延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	平城宮 いざない館	計	
16,963人	20,519人	7,585人	11,913人	6,360人	6,468人	605人	70,413人	3,653人

*活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2018.3.31現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、新庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスをおこなう。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸出、複写サービスをおこなう。

また、奈良文化財研究所の刊行物についても、主要なものについてPDF化をおこない、学術情報リポジトリとしてインターネットを通じて公開している。

2018度には木簡データベース、木簡辞典の後継データベースとなる木簡庫が公開され、古代地名検索システムのリニューアルをおこなう等、公開データベースの充実に力を入れている。

公開データベース一覧	2017年度 アクセス件数
木簡データベース	24,530
木簡画像データベース〔木簡辞典〕	29,303
木簡画像データベース〔木簡辞典〕〈韓国語版〉	885
木簡画像データベース〔木簡辞典〕〈中国語版〉	1,596
木簡画像データベース〔木簡辞典〕〈英語〉	1,080
木簡辞典／電子くずし字字典連携検索	218,021
木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	870,156
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	476
墨書土器画像データベース〔墨書土器辞典〕	1,322
和同開珎出土遺跡データベース	180
平城京出土陶硯データベース	398
遺跡データベース	5,101
地方官衙関係遺跡データベース	1,284
古代寺院遺跡データベース	3,528
官衙関係遺跡整備データベース	269
遺跡の斜面保護データベース	146
発掘庭園データベース	4,587
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	363
薬師寺典籍文書データベース	196
大宮家文書データベース	195
所蔵図書データベース	51,095
報告書抄録データベース	3,171
全国遺跡報告総覧	8,864,899
考古関連雑誌論文情報補完データベース	4,416
学術情報リポジトリ	61,861

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所 学報

- 第1冊 仏師運慶の研究 (1954)
 第2冊 修学院離宮の復元的研究 (1954)
 第3冊 文化史論叢 (1954)
 第4冊 奈良時代僧房の研究 (1957)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1958)
 第6冊 中世庭園文化史 (1959)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1959)
 第8冊 文化史論叢 I (1960)
 第9冊 川原寺発掘調査報告 (1960)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1961)
 第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究— (1962)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶 (1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究 (1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告 II
官衙地域の調査 (1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告 III
内裏地域の調査 (1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告 IV
官衙地域の調査 (1966)
 第18冊 小堀遠州の作事 (1966)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家 (1968)
 第20冊 名物烈の成立 (1970)
 第21冊 研究論集 I (1972)
 第22冊 研究論集 II (1974)
 第23冊 平城宮発掘調査報告 VI
平城京左京一条三坊の調査 (1975)
 第24冊 高山一町並調査報告— (1975)
 第25冊 平城京左京三条二坊 (1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告 VII
内裏北外郭の調査 (1976)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I (1976)
 第28冊 研究論集 III (1976)
 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告— (1976)
 第30冊 五條一町並調査の記録— (1977)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II (1978)
 第32冊 研究論集 IV (1978)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1978)
 第34冊 平城宮発掘調査報告 IX
 宮城門・大垣の調査 (1978)
 第35冊 研究論集 V (1979)
 第36冊 平城宮整備調査報告 I (1979)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III (1980)
 第38冊 研究論集 VI (1980)
 第39冊 平城宮発掘調査報告 X
古墳時代 I (1981)
 第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
第一次大極殿地域の調査 (1982)
 第41冊 研究論集 VII (1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
馬寮地域の調査 (1985)
 第43冊 日本における近世民家 (農家) の系統的発展 (1985)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1986)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告 (1987)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1989)
 第47冊 研究論集 VIII (1989)
 第48冊 年輪に歴史を読む
—日本における古年輪学の成立— (1990)
 第49冊 研究論集 IX (1991)
 第50冊 平城宮発掘調査報告書 XIII
内裏の調査 II (1991)
 第51冊 平城宮発掘調査報告書 XIV
平城宮第二次大極殿院の調査 (1993)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書 (1993)
 第53冊 平城宮朱雀門の復元的研究 (1994)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊
—長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告 (1995)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV
—飛鳥水落遺跡の調査— (1995)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告 (1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡 (1999)
 第58冊 研究論集 X (1999)
 第59冊 中世瓦の研究 (2000)
 第60冊 研究論集 XI (1999)
 第61冊 研究論集 XII (2001)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告 (2001)
 第63冊 山田寺発掘調査報告 本文編
図版編 (2002)
 第64冊 研究論集 XIII (2002)
 第65冊 文化財論叢 III 奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集 (2002)

- 第66冊 研究論集XV (2003)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編 [法華寺南遺跡] (2003)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査 (2003)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査 (2003)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査 (2005)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告 I (2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告 I
石のカタ古墳・音乗谷古墳の調査 (2005)
- 第73冊 タニ窯跡 A6号窯跡発掘調査報告書 (2005)
- 第74冊 古代庭園研究 I (2006)
- 第75冊 研究論集 XV (2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告 (2007)
- 第77冊 日韓文化財論集 I (2008)
- 第78冊 近世瓦の研究 (2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 I
基壇・礎石 (2009)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 IV
瓦・屋根 (2009)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 II
木部 (2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 III
彩色・金具 (2010)
- 第83冊 研究論集16 (2010)
- 第84冊 平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査 2 本文編/図版編 (2011)
- 第85冊 漢長安城桂宮 報告編・論考編 (2011)
- 第86冊 研究論集17
平安時代庭園の研究—古代庭園研究 II— (2011)
- 第87冊 日韓文化財論集 II (2011)
- 第88冊 西トップ遺跡調査報告
—アンコール文化遺産保護共同研究報告書— (2011)
- 第89冊 四万十川流域 文化的景観研究 (2011)
- 第90冊 Western Prasat Top Site Survey Report
on Joint Research for the Protection of the
Angkor Historic Site (2012)
- 第91冊 遼寧省朝陽地区隋唐墓の整理と研究 (2012)
- 第92冊 文化財論叢 IV 奈良文化財研究所 創立六十
周年記念論文集 (2012)
- 第93冊 奈良山発掘調査報告 II—歌姫西須恵器窯の調
査— (2014)
- 第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 V—藤原京左京六
条三坊の調査— (2017)
- 第95冊 日韓文化財論集 III (2015)
- 第96冊 中世庭園の研究—鎌倉・室町時代— (2015)

奈良文化財研究所 史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製) (1955)
- 第2冊 西大寺叡尊伝記集成 (1956)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編 I (1964)
- 第4冊 俊乘房重源伝記集成 (1965)
- 第5冊 平城宮木簡一 図版 (1966)
解説 (1969)
(平城宮発掘調査報告 V)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編 2 (1968)
- 第7冊 唐招提寺史料 I (1971)
- 第8冊 平城宮木簡二 図版 (1975) 解説 (1975)
(平城宮発掘調査報告 VIII)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録 I (1975)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録 II (1976)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録 III (1977)
- 第12冊 藤原宮木簡一 図版・解説 (1978)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV (1978)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録 V (1979)
- 第15冊 東大寺文書目録第 1 巻 (1979)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録 VI (1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 (1981)
- 第18冊 藤原宮木簡二 (1981)
- 第19冊 東大寺文書目録第 2 巻 (1981)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録 VII (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第 1 巻 (1981)
- 第22冊 七大寺巡礼私記 (1982)
- 第23冊 東大寺文書目録第 4 巻 (1982)
- 第24冊 東大寺文書目録第 5 巻 (1983)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成 I (1983)
- 第26冊 東大寺文書目録第 6 巻 (1984)
- 第27冊 木器集成図録—近畿古代編— (1985)
- 第28冊 平城宮木簡四 (1986)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第 1 巻 (1986)
- 第30冊 山内清男考古資料 1 (1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成 II (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料 2 (1989)
- 第33冊 山内清男考古資料 3 (1992)
- 第34冊 山内清男考古資料 4 (1992)
- 第35冊 山内清男考古資料 5 (1992)
- 第36冊 木器集成図録—近畿原始編— (1993)

- 第37冊 梵鐘実測図集成（上）（1993）
 第38冊 梵鐘実測図集成（下）（1993）
 第39冊 山内清男考古資料6（1993）
 第40冊 山田寺出土建築部材集成（1995）
 第41冊 平城京木簡一（1995）
 第42冊 平城宮木簡五（1996）
 第43冊 山内清男考古資料7（1996）
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻（1996）
 第45冊 北浦定政関係資料（1997）
 第46冊 山内清男考古資料8（1997）
 第47冊 北魏洛陽永寧寺（1998）
 第48冊 発掘庭園資料（1998）
 第49冊 山内清男考古資料9（1998）
 第50冊 山内清男考古資料10（1999）
 第51冊 山内清男考古資料11（2000）
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法（2000）
 第53冊 平城京木簡二 長屋王家木簡二（2001）
 第54冊 山内清男考古資料12（2000）
 第55冊 法隆寺古絵図集（2001）
 第56冊 法隆寺考古資料（2002）
 第57冊 日中古代都城図録（2002）
 第58冊 山内清男考古資料13（2002）
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
 第60冊 平城京条坊総合地図（2003）
 第61冊 鞏義黄冶唐三彩（2003）
 第62冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉一（2003）
 第63冊 平城宮木簡六（2004）
 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
 第65冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉二（2004）
 第66冊 山内清男考古資料14（2004）
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻（2004）
 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編（2004）
 第69冊 平城京漆紙文書（一）（2004）
 第70冊 山内清男考古資料15（2005）
 第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ 朝鮮・日本編
 （2005）
 第72冊 畿内産土師器集成西日本編（2005）
 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見（2006）
 第74冊 山内清男考古資料16（2006）
 第75冊 平城京木簡三 二条大路木簡Ⅰ（2006）
 第76冊 評制下荷札木簡集成（2006）
 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
 第78冊 黒草紙・新黒双紙（2007）
 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説（2007）

- 第80冊 平城京出土陶硯集成Ⅱ 平城京・寺院（2007）
 第81冊 高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
 第83冊 興福寺典籍文書目録（2009）
 第84冊 山内清男考古資料17（2009）
 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説（2010）
 第86冊 キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
 第87冊 明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
 第88冊 藤原宮木簡三 図版・解説（2012）
 第89冊 仁和寺史料 古文書編一（2013）
 第90冊 大宮家文書調査報告書（2014）

奈良文化財研究所 研究報告

- 第1冊 文化的景観研究集会（第1回）報告書（2009）
 第2冊 河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
 第3冊 古代東アジアの造瓦技術（2010）
 第4冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
 第5冊 文化的景観研究集会（第2回）報告書（2010）
 第6冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
 第7冊 文化的景観研究集会（第3回）報告書（2011）
 第8冊 鞏義白河窯の考古新発見（2011）
 第9冊 古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
 第10冊 文化的景観研究集会（第4回）報告書（2012）
 第11冊 河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2012）
 第12冊 奈良文化財研究所研究報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」（2013）
 第13冊 文化的景観研究集会（第5回）報告書（2013）
 第14冊 古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編／資料編（2014）
 第15冊 第18回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器Ⅰ（2015）
 第16冊 キトラ古墳天文図 星座写真資料（2015）
 第17冊 藤原宮跡出土馬の研究（2015）
 第18冊 『官衙・集落と土器Ⅱ』第19回古代官衙・集落研究会報告書（2016）
 第19冊 『郡庁域の空間構成』第20回古代官衙・集落研究会報告書（2017）

奈良文化財研究所 基準資料

- 第1冊 瓦編Ⅰ 解説（1974）
 第2冊 瓦編Ⅱ 解説（1975）
 第3冊 瓦編Ⅲ 解説（1976）
 第4冊 瓦編Ⅳ 解説（1977）

- 第5冊 瓦編5 解説 (1977)
- 第6冊 瓦編6 解説 (1979)
- 第7冊 瓦編7 解説 (1980)
- 第8冊 瓦編8 解説 (1981)
- 第9冊 瓦編9 解説 (1984)

飛鳥資料館 図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 (1976)
- 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文編 (1977)
- 第3冊 日本古代の墓誌 (1977)
- 第4冊 日本古代の墓誌 銘文編 (1978)
- 第5冊 古代の誕生仏 (1978)
- 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺— (1979)
- 第7冊 日本古代の鴟尾 (1980)
- 第8冊 山田寺展 (1981)
- 第9冊 高松塚拾年 (1982)
- 第10冊 渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺— (1983)
- 第11冊 飛鳥の水時計 (1983)
- 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで— (1984)
- 第13冊 藤原—半世紀にわたる調査と研究— (1984)
- 第14冊 日本と韓国の塑像 (1985)
- 第15冊 飛鳥寺 (1985)
- 第16冊 飛鳥の石造物 (1986)
- 第17冊 萬葉乃衣食住 (1987)
- 第18冊 壬申の乱 (1987)
- 第19冊 古墳を科学する (1988)
- 第20冊 聖徳太子の世界 (1988)
- 第21冊 仏舍利埋納 (1989)
- 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天 (1989)
- 第23冊 日本書紀を掘る (1990)
- 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察 (1991)
- 第25冊 飛鳥の源流 (1991)
- 第26冊 飛鳥の工房 (1992)
- 第27冊 古代の形 (1995)
- 第28冊 蘇我三代 (1995)
- 第29冊 齊明紀 (1996)
- 第30冊 遺跡を測る (1997)
- 第31冊 それからの飛鳥 (1998)
- 第32冊 UTAMAKURA (1998)
- 第33冊 幻のおおでら—百濟大寺 (1998)
- 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として (1999)
- 第35冊 あすかの石造物 (2000)
- 第36冊 飛鳥池遺跡 (2000)
- 第37冊 遺跡を探る (2001)
- 第38冊 ‘あすか—以前’ (2002)
- 第39冊 A0の記憶 (2002)
- 第40冊 古年輪 (2003)
- 第41冊 飛鳥の湯屋 (2004)
- 第42冊 古代の梵鐘 (2004)
- 第43冊 飛鳥の奥津城—キトラ・カラト・マルコ・高松塚 (2005)
- 第44冊 東アジアの古代苑池 (2005)
- 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち (2006)
- 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武 (2007)
- 第47冊 奇偉莊巖山田寺 (2007)
- 第48冊 キトラ古墳壁画十二支—子・丑・寅— (2008)
- 第49冊 まぼろしの唐代精華—黄冶唐三彩窯の考古新発見— (2008)
- 第50冊 キトラ古墳壁画四神—青龍白虎— (2009)
- 第51冊 三燕文化の考古新発見—北方騎馬民族のかがやき— (2009)
- 第52冊 キトラ古墳壁画四神 (2010)
- 第53冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
- 第54冊 星々と日月の考古学 (2011)
- 第55冊 飛鳥遺珍—のこされた至宝たち— (2011)
- 第56冊 比羅夫がゆく—飛鳥時代の武器・武具・いくさ— (2012)
- 第57冊 花開く都城文化 (2012)
- 第58冊 飛鳥寺2013 (2013)
- 第59冊 飛鳥・藤原京への道 (2013)
- 第60冊 いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代— (2014)
- 第61冊 はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶— (2014)
- 第62冊 はじまりの御仏たち (2015)
- 第63冊 キトラ古墳と天の科学 (2015)
- 第64冊 『文化財を撮る—写真が遺す歴史』
- 第65冊 『祈りをこめた小塔』
- 第66冊 『早川和子が描く飛鳥むかしむかし』
- 第67冊 『藤原京を掘る—藤原京—等地の調査—』 (2017)
- 第68冊 『高松塚古墳を掘る—解明された築造方法—』 (2017)

飛鳥資料館 カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道 (1975)
- 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品 (1975)
- 第3冊 飛鳥の仏像 (1978)
- 第4冊 桜井の仏像 (1979)
- 第5冊 高取の仏像 (1980)
- 第6冊 檀原の仏像 (1981)

- 第7冊 飛鳥の王陵 (1982)
 第8冊 大官大寺—飛鳥最大の寺— (1985)
 第9冊 高松塚の新研究 (1992)
 第10冊 飛鳥の一と—最近の調査から— (1994)
 第11冊 山田寺 (1996)
 第12冊 山田寺東回廊再現 (1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ (2001)
 第14冊 古墳を飾る (2005)
 第15冊 うずもれた古文書—みやこの漆紙文書の世界— (2006)
 第16冊 飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相 (2006)
 第17冊 飛鳥の考古学2006 (2007)
 第18冊 「とき」を撮す—発掘調査と写真— (2007)
 第19冊 飛鳥の考古学2007 (2008)
 第20冊 飛鳥の考古学2008 (2009)
 第21冊 飛鳥の考古学2009 (2010)
 第22冊 小さな石器の大きな物語 (2010)
 第24冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
 第24冊 飛鳥の考古学2010 (2011)
 第25冊 鑄造技術の考古学—東アジアにひろがる鑄物師のわざ— (2011)
 第26冊 飛鳥の考古学2011 (2012)
 第27冊 飛鳥の考古学2012 (2013)
 第28冊 飛鳥・藤原京を考古科学する (2013)
 第29冊 キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍 (2014)
 第30冊 飛鳥の考古学2013 (2014)
 第31冊 大和の美仏に魅せられて (2014)
 第32冊 飛鳥の考古学2014 (2014)
 第33冊 飛鳥の考古学2015 (2015)
 第34冊 飛鳥の考古学2017 (2018)

その他の刊行物 (2017年度)

- ・奈良文化財研究所紀要2017
- ・奈文研ニュースNo.65～68
- ・埋蔵文化財ニュースNo.170～173
- ・『永野太造作品展 草創期の奈文研を支えた写真家』平城宮跡資料館企画展リーフレット
- ・『ナント！すてきな!?平城生活♪』平城宮跡資料館企画展リーフレット
- ・『地下の正倉院展—国宝平城宮跡出土木簡—』平城宮跡資料館特別展リーフレット
- ・『平城京の戌』平城宮跡資料館ミニ展示リーフレット
- ・『弥生時代の脚付き編みかご 瀬田遺跡 (飛鳥藤原第

- 187次調査)の成果 (発掘調査速報展資料)』
- ・『特別史跡高松塚古墳発掘調査報告—高松塚古墳石室解体事業にともなう発掘調査—国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書1』
- ・『出雲市内神社建造物調査報告書』
- ・『矢掛町矢掛宿伝統的建造物群保存対策調査報告書 (再調査編)』
- ・『近世城跡の近現代』平成28年度遺跡整備・活用研究集会報告書
- ・『回遊式庭園と庭園文化』平成29年度庭園の歴史に関する研究会報告書
- ・『日本所在の銭弘俣八万四千塔の調査1』
- ・『都市の営みの地層 宇治・金沢』文化的景観スタディーズ04
- ・『地域のみかたとしての文化的景観—文化的景観研究集会 (第8回) 報告書—』
- ・『文化的景観全覧図—鳥瞰図による文化的景観の表現』
- ・『大坂城石垣石丁場跡小豆島石丁場跡の海中残石分布調査』
- ・『地方官衙政庁域の変遷と特質』第21回古代官衙・集落研究会研究報告資料
- ・『地方官衙政庁域の変遷と特質』第21回古代官衙・集落研究会 政庁域 遺構集成 (第一分冊 地方官衙図版編)
- ・『地方官衙政庁域の変遷と特質』第21回古代官衙・集落研究会 政庁域 遺構集成 (第二分冊 宮都図版・表編)
- ・『古代瓦研究Ⅷ—東大寺式軒瓦の展開— —飛雲文軒瓦の展開—』
- ・『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦ 一本づくり・一枚づくりの展開1』
- ・『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦ 一本づくり・一枚づくりの展開1 資料集 (東日本編)』
- ・『デジタル技術で魅せる文化財—奈文研とICT—』
- ・『10周年記念 地下の正倉院展 10年のあゆみ』
- ・『林良彦先生業績目録』
- ・『発掘調査報告書総目録 兵庫県編』

人事異動 (2017. 4. 1~2018. 3. 31)

●2017年4月1日付

研究支援推進部総務課総務係長 天 野 千代子
 研究支援推進部研究支援課施設係長 立 川 弥生子
 研究支援推進部総務課総務係 八 尾 光 記
 研究支援推進部総務課財務係 石 坪 直 紀
 本部事務局総務企画課係長 (総務担当)
 (併) 東京国立博物館総務部 高 田 幸 恵
 奈良国立博物館総務課渉外室企画推進係
 高 梨 泰 裕
 研究支援推進部連携推進課経営戦略係
 植 田 義 雄

文化遺産部長

(兼) 文化遺産部建造物研究室長
 (兼) 文化遺産部景観研究室長 島 田 敏 男
 副所長 (兼) 都城発掘調査部副部長 渡 邊 晃 宏
 埋蔵文化財センター長
 (兼) 埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長
 (兼) 埋蔵文化財センター環境考古学研究室長
 (兼) 埋蔵文化財センター年代学研究室長

高 妻 洋 成
 都城発掘調査部主任研究員 庄 田 慎 矢
 都城発掘調査部主任研究員 桑 田 訓 也
 埋蔵文化財センター主任研究員 山 崎 健
 都城発掘調査部考古第一研究室研究員
 (兼) 埋蔵文化財センター保存科学研究室
 田 村 朋 美
 京都国立博物館保存科学室長 降 幡 順 子
 企画調整部国際遺跡研究室特任研究員
 杉 山 洋
 埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室特任研究員
 小 池 伸 彦
 都城発掘調査部考古第一研究室アソシエイトフェロー
 土 橋 明梨紗

●2017年6月1日付

飛鳥資料館学芸室アソシエイトフェロー
 中 田 愛 乃

●2017年6月30日付

辞 職 松 田 和 貴

●2017年7月1日付

都城発掘調査部遺構研究室研究員 福 嶋 啓 人
 埋蔵文化財センター保存修復科学研究室研究員
 松 田 和 貴
 企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー
 座 覇 え み

●2017年8月31日付

辞 職 植 田 義 雄

●2017年9月30日付

辞 職 (転出) 南 幸 一
 辞 職 山 本 亮

●2017年10月1日付

研究支援推進部総務課課長補佐 谷 川 喜 隆

●2017年12月1日付

埋蔵文化財センター保存修復科学研究室
 アソシエイトフェロー 柳 成 煜

●2018年2月28日付

辞 職 張 祐 榮

●2018年3月1日付

企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー
 廣 瀬 智 子

●2018年3月31日付

辞 職 (転出) 島 田 健 治
 辞 職 (転出) 伴 佳 英
 辞 職 (転出) 東 部 浩 志
 辞 職 (転出) 梶 原 孝 次
 辞 職 (転出) 北 村 加 奈
 辞 職 諫 早 直 人
 任期満了退職 飯 田 ゆりあ
 任期満了退職 方 国 花
 任期満了退職 大 橋 正 浩
 任期満了退職 村 田 泰 輔
 任期満了退職 菊 地 智 慧

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2017年度	2018年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	819,795	863,852
施設整備費	1,346,769	116,166
自己収入（入場料等）	49,155	48,605
計	2,215,719	1,028,623

土地と建物

単位：㎡

	土地	建物（建面積/延面積）	建築年
本庁舎地区	8,878.94	2,812.45/11,387.06	2018年
平城宮跡地区	※	13,328.49/21,394.61	1970年他
藤原地区	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2018年4月6日現在）

単位：千円

研究種目	2017年度				（参考）2018年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
基盤研究（S）	1	33,670	—	—	—	—	—	—
基盤研究（A）	2	13,000	—	—	2	17,680	—	—
基盤研究（B）	7	20,410	4（4）	3,250	7	22,490	1（1）	—
基盤研究（C）	—	—	17	19,500	—	—	21	25,220
挑戦的研究（開拓）	1	5,980	—	—	1	9,750	—	—
挑戦的研究（萌芽）	—	—	1	2,730	—	—	1	3,640
挑戦的萌芽研究	—	—	2	1,950	—	—	1	1,040
若手研究（A）	5	18,460	1（1）	—	4	20,280	—	—
若手研究（B）	—	—	22	19,630	—	—	16	13,000
若手研究	—	—	—	—	—	—	4	5,720
新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究	1	2,470	—	—	1	2,470	—	—
研究成果公開促進費（データベース）	1	4,000	—	—	—	—	—	—

※同一の研究課題で①と②の両方が交付されるもの（一部基金分）の件数はそれぞれに含み、②の括弧書きは共通するものの内数である。

受託調査研究

単位：千円

区分	2017年度		2018年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	25	203,571	26	253,015
発掘	16	142,077	9	32,862
計	41	345,648	35	285,877

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2016年度		2017年度	
	件数	金額	件数	金額
	10	7,280	7	15,150

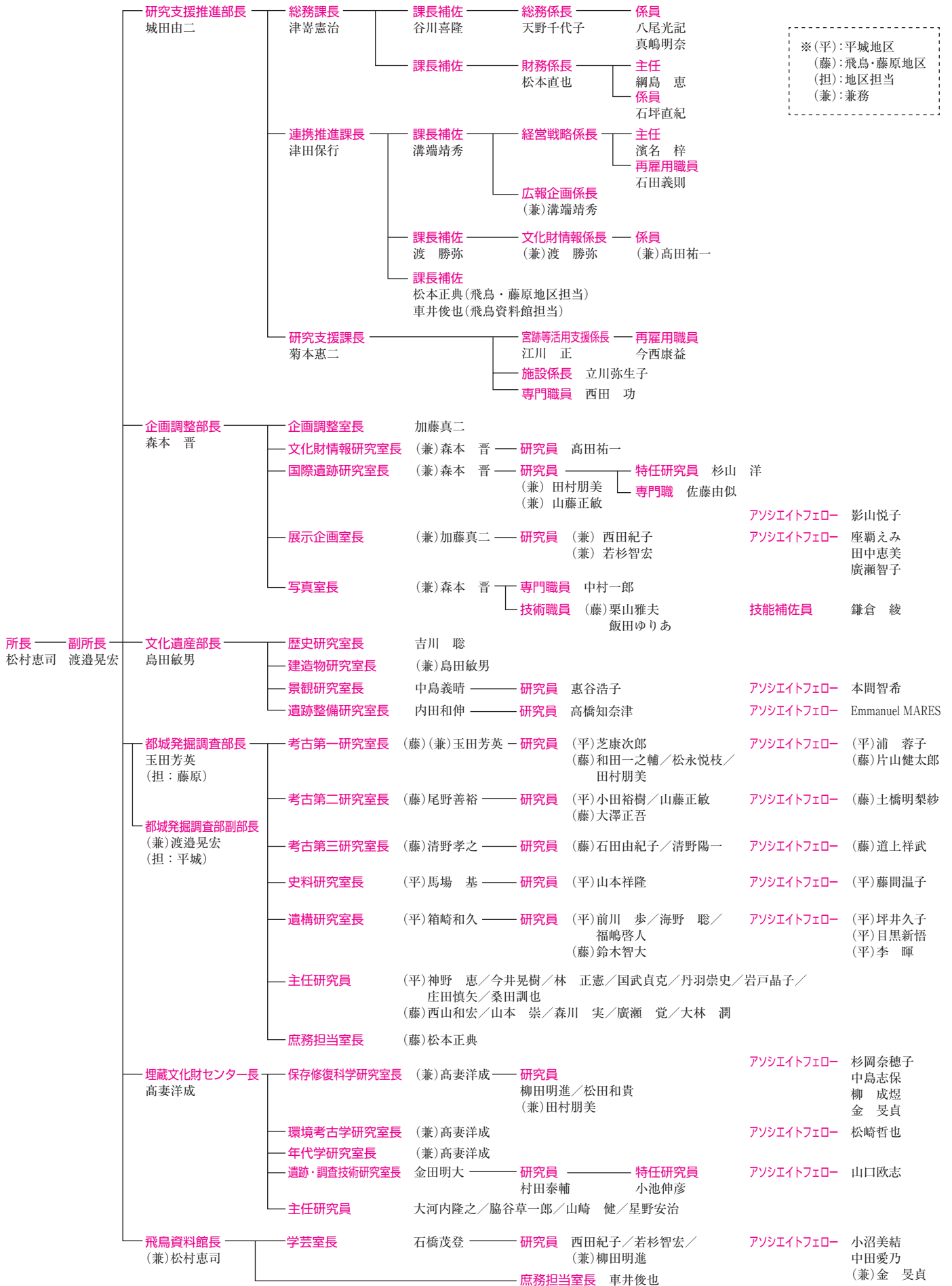
※採択年による集計

※2ヵ年にわたる場合は初年度に計上

2018年4月1日現在

職員一覧

※(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(兼):兼務



客員研究員一覧

2018年4月1日現在

平成30年度客員研究員名簿

所 属	氏 名
研究支援推進部	水野 裕史
研究支援推進部	渡辺 伸行
企画調整部（企画調整室）	羽生 淳子
企画調整部（文化財情報研究室）	小林 謙一
文化遺産部（歴史研究室）	綾村 宏
文化遺産部（歴史研究室）	山田 徹
文化遺産部（建造物研究室）	林 良彦
文化遺産部（遺跡整備研究室）	EDWARDS Walter Drew
文化遺産部（遺跡整備研究室）	小野 健吉
都城発掘調査部（考古第二研究室）	青木 敬
都城発掘調査部（平城・史料研究室）	黒田 洋子
都城発掘調査部（平城・史料研究室）	杉本 一樹
都城発掘調査部（平城・史料研究室）	館野 和己
都城発掘調査部（平城・史料研究室）	方 国花
都城発掘調査部（平城・遺構研究室）	大橋 正浩
都城発掘調査部（飛鳥・藤原）	上原 真人
都城発掘調査部（飛鳥・藤原）	黒羽 亮太
都城発掘調査部（飛鳥・藤原）	巽 淳一郎
都城発掘調査部（飛鳥・藤原）	深澤 芳樹
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	青木 政幸
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	大賀 克彦
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	小椋 大輔
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	北田 正弘
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	肥塚 隆保
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	佐藤 昌憲
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	澤田 正昭
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	辻本 與志一
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	難波 洋三
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	浜田 拓志
埋蔵文化財センター（保存修復科学研究室）	福永 香
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	上 中央子
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	大江 文雄
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	菊地 大樹
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	茂原 信生
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	中橋 孝博
埋蔵文化財センター（環境考古学研究室）	丸山 真史
埋蔵文化財センター（年代学研究室）	伊東 隆夫
埋蔵文化財センター（年代学研究室）	兎島 大輔
埋蔵文化財センター（年代学研究室）	藤井 裕之
埋蔵文化財センター（年代学研究室）	光谷 拓実
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	赤司 善彦
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	小澤 毅
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	狭川 真一
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	中村 亜希子
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	西口 和彦
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	西村 康
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	野口 淳
埋蔵文化財センター（遺跡・調査技術研究室）	山中 敏史